

血の文字

黒岩涙香

青空文庫

前置（著者の）

「ああ、斯^こうも警察のお手が能^よく行届^きき、何^どうしても逃れぬ事が出来ぬと知^{しつ}たら、決して悪事は働かぬ所だツたのに」とは或^{ある}罪人が己^{おの}れの悪事露見して判事の前に引^{ひきすえ}据^すられし時の懺悔^{ざんげ}の言葉なりとかや、余^よは此^{この}言葉を聞き此記録を書綴^しる心を起しぬ、此記録を読むものは何^{なんびと}人も悪事を働きては間^{まじよく}職に合^あわぬことを覚^{さと}り、算盤^{そろばん}珠^{たま}に掛^かけても正直に暮^くすほど利益な事は無^なきを知らん、殊^{こと}に今^{こん}日は鉄道も有^あり電信も有^ある世界にて警察の力を潜^{くぐ}り果^おせるとは到^{とうてい}底出来^いざる所にして、晚^{おそ}かれ早^{はや}かれ露見して罰せらるゝ

は一つなり。

斯く云わば此記録の何たるやはおのずか自ら明かならん、こ個は罪人を探り之を追い之と闘い之に勝ち之に敗られなどしたる探偵の実話の一なり。

第一回（怪しき客）

余が医学を修めて最早卒業せんとせし頃（時に余が年二十三）
 余は巴里府プリンス街に下宿し居たるが余が借れる間の隣の室に
 中肉中背にて髭鬚を小綺麗に剃附て容貌にも別に癖の無き一
 人の下宿人あり、宿の者等此人を目科「様」とて特に「様」附に
 して呼び、帳番も廊下にて摺違うたびに此人には帽子を脱ぎて
 挨拶するなど大に持做ぶりの違う所あるにぞ、余は何時とも
 無く不審を起し目科とは抑も何者にやと疑いたり、素より室と室、

隣同士の事とて或は隣寸まっちを貸し或は小刀ないふを借るぐらいの交際つきあいは有り、又時としては朝一緒に宿を出いで次の四辻にて分るゝまで語らいながら歩むなどの事も有りたれど其身分其職業などは探り知ろう様ようも無く唯ただ此の目科に美しき細君ありて充分目科を愛し且かつ恭うやまう様子だけは知れり、去されど目科は妻ある身に不似合なる不規則せんぱん千萬の身持にて或時は朝猶暗なほき内に家を出いるかと思えば或時は夜通し歸り来きたらず又人の皆寝ねずま鎮りたる後のちに至いたり細君を叩き起すことも有り其そのうえ上時々は一週間ほど歸り来らぬことも珍めづしからず、斯かくも不規則なる所夫おととに仕え細君が能よく苦情を鳴ならさぬと思えば余は益々いぶか訝あしさに堪たえず、終ついに帳番に打うち向むいて打うち附つけに問いたる所、目科の名前が余の口より離れ切るや切らぬうち帳番は怩ふ

然と色を作し、毎も宿り客の内幕を遠慮も無く話し散すに引代て、余計な事をお問なさるなど厳しく余を遣込められたれば余が不審は是よりして却て、益々募り、果は作法をも打忘れて熱心に目科の行いを見張るに至れり。

見張り初めてより幾程も無く余は目科の振舞に最と怪しく且恐ろしげなる事あるを見て何うせ碌な人には非ずと思いたり、其事は他ならず、或日目科は当時の流行を穿ちたる最立派なる服を被かざり胸には「レジョン、ドノル」の勲章を燦めかせて外より帰ると見たるに其僅か数日後に彼れは最下等の職人が纏う如き穢らしき仕事衣に破れたる帽子を戴きて家を出たり、其時の彼れが顔附は何処とも無く悪人の相を帯び一目見るさえ怖らしき程なり

き、是さえあるに或午後は又彼れが出行かんとするとき其細君が
闕しきいもとの許まで送り出で、余所目よそめにも羨うらやまるゝほど親したしげに彼れが首に
手を巻きて別れのキスを移しながら「貴方あなた、大事をお取とりなさい、
内うちには私わたくしが氣遣うて待て居ますから」と叫びたり、大事を取れ
とは何事にや、委細いさいの心は分らねど扱さては、扱は、細君が彼れの身
持を咎とがめぬのみかは何も彼も承知の上で却て彼れに腹を合せ、彼
れが如き異様なる振舞を為なさしむるにや、斯く思いて余は殆ほとんど震
い上り世には恐ろしき夫婦もある哉かなと嘆たんじたれど、此後の事は是
よりも猶なお酷ひどかりき。

余は修学に身を委ねながらも、夜に入りては「レローイ」珈かひい
琲館かんと云えるに行き球たまや歌牌かるたの勝負を樂むが捨難すてがたき蕩樂どうらくな

りしが、一夜夫等の楽み終りて帰り来り、猶お球突の戯れを想
あるよそれら
 いながら眠りに就しに、夢に球と球と相触れて憂々と響く音に
つき
 耳を襲われ、驚き覚めて頭をれば其響は球の音にあらで外より
さ
かしらあぐ
 余が室の戸を急がわしく叩くにぞありける、時ならぬ真夜中に
 人の眠りを妨るは何れの没情漢ぞと打呟きながら、起行
いず
ぼつじようかん
うちつぶや
おきゆ
 きて戸を開くに、突て入る一人は是なん目科其人にして衣服の
ついで
いちにん
 着様は紊れ、飾り衿の胸板は引裂かれ、帽子は失い襟飾りは曲り
きさま
みだ
しやつ
 たるなど一目に他人と組合い攫み合いたるを知る有様なるに其う
つか
 え顔は一面に血塗れなれば余は全く仰天し「や、や、貴方は何う
まみ
ど
 成ツた」と叫び問う、目科は其声高しと叱り鎮めて「いや此傷は、
なご
 なに太した事でも有ますまいが何分にも痛むので幸い貴方が医学
たい

生だから手当を仕て貰おうと思ひまして」と答う、余は無言の儘に彼れを据らせ其傷を檢むるに成るほど血の出る割には太した怪我にもあらず、爾れど左の頬を耳より口まで引抓れたる者にして処々ところ／＼に肉さえ露出たれば痛みは左こそと察せらる、頓て余が其傷を洗いて夫々それ／＼の手術を施し終れば目科は厚く礼を述べ「いや是くらいの怪我で逃れたのは未しまだもです。併ししか此事は誰にも言わぬ様に願います」との注意を遺して退きたり、是より夜の明るまで余は眠るにも眠られず、様々の想像を浮べ来りて是か彼れかと考え廻すに目科は追剥か盗坊か但しは又強盗か、何しろ極々の悪人には相違なし。

爾れど彼れ翌日は静かに余が室に入来り再び礼を繰返したる

末、意外にも余に晚餐の饗応せんといいいで言出たり、晚餐の饗応などとは彼れが柄に無き事と思ひ余は少し不気味ながらも唯たゞ彼れが本性を見みあらわ現さんと思ふ一心にて其招きに応じ、氣永く構えて耳目の及ぶだけ氣を附けたれど露つゆほども余の疑いを晴す如き事柄は聞出しもせねば見出しもせずそつに晚餐を終りたり。

爾そつは云え是よりして余と目科の間柄は一ひとしお入近くなり、目科も何やら余に交まじわりを求めんとする如く幾度と無く余を招きて細君と共に間かんじき食なを為し殊ことに又夜に入りては欠かさず余を「レローイ」珈琲館まで追おいきた来り共に勝負事を試みたり、斯かくて七月のあるゆう一いち夕べ、五時より六時の間なりしが例の如く珈琲館にて戯たわむれ居いたるに、衣類も穢むさくるしく怪あやしげなる男一人、遽いちにんあわたゞしく入いりきた来り何や

らん目科の耳に細さ、や語くと見る間に目科は顔色を変て身構し「好よし
く直すぐに行く、早く帰ツて皆に爾そうい云え」と、命ずる間も急いそがわしげ
なり、男は此返事を得るや又一いつさん散に走去りしが、後に目科は余
に向い「誠に残念ですが、勤めには代られぬ譬たとえです、此勝負は明
日に譲り今日は是で失敬します」とて早や立去らん様子なり、勝
負の中止も快からねど夫それよりも不審に得え堪えず、彼れが秘密を見
現すは今なり、と余は思切ツて同行せざるの遺憾を述のぶるに「爾そうさ、
なに構うものか、来るなら一緒にいでお出なさい、随分面白いかも知
れませぬから」斯かく聞きて余は嬉しさに心迫こゝろき、返す言葉の暇さ
え惜しく、其そのまゝ儘帽子を戴いたきて彼れに従い珈琲館を走はしり出いでたり。

第二回（血の文字）

目科に従いて走りながらも余は唯だ彼れが本性を知る時の来りしを喜ぶのみ、此些細なる一事が余の後々に至大なる影響を及ぼす可しとは思い寄ろう筈も無し、目科は宛も足を渡世の資本にせる人なる乎と怪しまるゝほど達者に走り余は辛うじて其後に続くのみにて喘ぎく〜ロデオン街に達せし頃、一輛の馬車を認め目科は之れを呼留めて先ず余に乗らしめ馭者には「出来るだけ早く遣れ、バチグノールのレクルース街三十九番館だ」と告げ其身も続て飛乗りつ只管馬を急し立たり、「はゝア、行く先はバチ

グノールだと見えますな」とて余は最も謙遜の詞ことばを用い目科の返事を釣つり出さんと試むれど彼れ今までとは別人の如く其唇固く閉じ其眉半ば顰ひそみたるまゝにて言葉を発せず其様深く心に思う所ありて余が言葉の通ぜぬに似たり、彼れ何を斯かく考うるや、眼徒らまなひたずに空を眺めて動かざるは六むつかしき問題ありてを解そかん為ため苦めるにや、頓やがて彼れ衣囊かくしを探り最太いとふとやかなる嗅煙草かぎたばこの箱を取とり出し幾度か鼻に当て我を忘れて其香氣かきを愛めずる如くに見せ掛かる、去されど余は兼かねてより彼れに此癖あるを知れり、彼れ其実は全く嗅煙草を嫌きらえるも唯ただだ空の箱たすを携おえ居り、喜びにも悲みにも其心の動たく度たび我わが顔色を悟わられまじとて煙草を嗅かぐに紛まぎらせるなり、兎角とかくするうち馬車は早やクリチーの坂を登り其外なる大おお通どおりを横に切り

老女あり定めし此家の店番なる可し、目科は無遠慮に話の先を折り「何所だ、何所です」と急ぎ問う「三階ですよ、三階の取附です、本統に先ア此様な正直な家の中で、夫に日頃あの正直な老人を」と老女が答え来るを半分聞き直様段梯子を四段ずつ一足に飛上る、余は肺の臓の破るゝと思うほど呼吸の世話しきにも構わず其学をして続いて上れば三階なる取附の右の室は入口の戸も開放せし儘なるゆえ、之を潜りて客室、食堂、居室等を過ぎ小広き寢室へと入込みぬ、見れば茲には早や兩人の紳士ありて共に小棚の横手に立てり、其一人の外被に青白赤三色の線ある徽章を佩たるは問でも著き警察官にして今一人は予審判事ならん、判事より少し離れたる所に、卓子に向い何事をか書認めつゝ

有るは確たしかに判事かの書記生なり、是等これらの人々何が為に此室こにきたりたるぞ、余は怪むひまも無く床の真中に血に塗れたる死骸あるに氣附たり、小柄なる白髪この老人にして仰向あおむきに打倒うちたおれ、傷所きずしよよりいでたる血潮は既に凝りこりて黒くなれり。

余は驚きの余り踰よろめぎて倒れんとし纔わずかに傍らなる柱につかまり我が身体を支え得たり、支え得しまゝ暫しばしが程は殆ど身動きさえも得せず、読者よ余は当時医学生たりしだけに死骸を見たるは幾度なるを知らず病院にも之を見学校にも之を見たり、然れども面まのあたり犯罪の跡を見たるは実に此時が初てなり。然り此老人の死骸こそは恐ろしき犯罪の結果なること言う迄も無し、唯余たゞの隣人目科は余ほどに驚き恐れず足踏あしづみも確に警察官の許もとに進むに、警察

官は其顔を見るよりも「アア目科君か、折角呼よびに遣やつたけれど君を迎えるほどの事件では無なかツたよ目「とは又何どう云う訳で「いや君の智慧を借るまでも無く罪人が分わつて、仕舞まツた、実は最もう逮捕状を発したから今頃は捕縛ほぼくされた時分だ」罪人が解とりたらば先まずほほツと安心すべきところなるに目科は爾さは無なくて痛いたく失望の色を現あらわしそを体てい好いく紛まらさんため例の鼻煙草の箱を取出し鼻の先に二三度当て「おやおや罪人が分わつたのか」と云う、今度は予審判事が之に答えんとする如く「分わつたにも、最もう明白に分わつたよ、罪人は此老人が死切れた物と思ひ安心して逃にげて仕舞まツたが実は是これが本ほん統とうに天てん帝ていの見張みて居ると云う者だらうよ、老人は未まだ死し切きらずに居いて、必死の思しいで頭あたまを上げ、傷口から出る血ちに指さを

浸して床へ罪人の名を書附て置いて死だ。先ア見たまえそれ血の文字が歴々ありくと残ツて居る」此傷ましき語を聞きて余は直ちに床ゆかじ中ゆうを見廻すに成るほど死骸の頭の辺に恐ろしき血の文字あり
 MONIS 《モニシ》の綴りは死際しにぎわの苦痛に震いし如く揺れく
 になりたれど読擬よみまごう可くもあらず、目科も之を見しかども彼れ驚きしか驚かざるか鼻煙草を振るのみにて顔色には現わさず唯だ
 単に「夫で」と云う、今度は又警察署長「夫で分ツて居るじや無
 いか藻西太郎と云う者の名前の初めを書掛かきかけて事切れと成たのだ、
 藻西太郎とは此老人の唯一人の甥だ、老人が余ほど寵愛ちようあいして
 居たと云う事だ」と説明す、目科は唯口うちの中にて何事をか呟くの
 み、更に予審判事は今言さらいし警察官の説明を補わんとする如くに

「此文字が何よりの証拠だから何の様な悪人でも 剛情は張り得まい、殊に此老人を殺して夫が為に得の行くのは唯此藻西太郎一人だ、老人は巨多の財産を持て居て、死さえすれば甥の藻西へ転がり込む様になつて居る、のみならず老人の殺されたのは昨夜の事で、昨夜老人の許へ来たのは唯だ藻西一人さ、帳番の証言だから是も確かだ、藻西は宵の九時頃に来て十二時頃まで居た相だ、其後では誰も老人の室へ這入た者が無いと云うから是ほど確な証拠は有るまい」目科は無言にて聞き終り意味有りげなる言葉にて「なるほど明かだ、日を見るよりも明かに藻西太郎と云う奴は大馬鹿だ、此老人が殺されさえすれば第一に自分は疑われる身だから、其疑いを避る様に、切て盗坊の所為にでも見せ掛け何か品

物を盗んで置くとか此室を取散とりちらして置くとか夫それくらいの事は仕
 そうな者ものだ、老人を殺しながら夫それをせぬとは余り馬鹿過ると云う
 者ものだ警察官「爾そうさ別に此室を取散とりちらすとか云う様な疑いを避ける
 工夫は仕て無なかツた、殺すと早々逃たのだろう、余り智慧たくまの逞たくましい
 男では無いと見える、此このむき向むきなら捕縛すれば直じきに白状するだろう」
 と云い、猶なおも目科を小窓の所に誘い行きて小声にて何か話しを
 初め、判事は又書記に向い是これも何やらん差図を与え初めたり。

第三回（又不審）

これ
是にて先まず目科の身の上に関する不審だけは全く晴れたり、彼
れは盗坊どろぼうにも非あらず追剥あにも非あらず純然たる探偵吏たんでいりなり、探偵吏
なればこそ其身持不規則なりしなれ、身姿みなり時々変ぜしなれ、痛いたく
細君に氣遣われしなれ、「様さん」附づけにも呼ばれしなれ、顔に傷をも
受けしなれ、今は少しの不審も無し彼れが事は露ほども余が心に
関せず、之に引代たぐて唯痛いたく余の心に留り初めしは床の上の死骸な
り、余が心は全く彼の死骸に縛しばり附つけられたるに似たり、今まで
目科を怪みたるよりも猶なお切に彼の死骸を思う、初しがて死がい体を見し
時の驚きと恐れとは何時いつしか消えて次第に物の理を考うる力も己われ
に復かえりしかば余は唯ただ四辺あたりに在る総すべての物に熱心に注意を配り熱
心に考え初めぬ、身は戸の口に立たちし儘まなるも眼まなこは室しつじゆう中ちゆうを馳はせま

廻れり、今まで絵入の雑誌などにて人殺の場所を写したる
 図などは見し事あり孰れにも其辺最と取散したる景色見え
 しに、實際なる此人殺しの寢室の内には取散したる跡を見ず老人
 の日頃不自由なく暮し而も質素を旨として万事に注意の普き事は
 是だけに察せらる、寢床及び窓掛を初め在ゆる品物に手入能く
 行届き塵も無ければ汚れも見えず、此老人の殺されしは必ず警察
 官及び判事等の推量せし通り昨夜の事なりしならん、其証拠とも
 云う可きは寢床の用意既に整い、寢巻及び肌着ともに寢台の傍に
 出しあり猶お枕頭なる小卓の上には寢際に飲ん為なるべく、
 砂糖水を盛たる硝盃も其儘にして又其横手には昨日の毎夕新聞
 一枚と外に寸燐の箱一個あり、小棚の隅に置きたる燭台は其蠟燭

既に燃^{もえつく}尽せしかど定めし此犯罪を照したるものならん、曲者は
 蠟燭を吹消さずに逃去りしと見え燭台の頂^{てつぺん}辺^{つらゝ}に氷柱の如く垂れ
 たる燭^{しよくるい} 涙^{なみ}は黒き汚れの色を帯ぶ、個^こは蠟燭の自から燃尽すま
 で燃^{もえい}居たるしるしなり。

総^{すべ}て是等^{これら}の細^こき事柄^{こまか}は殆^{ほとん}ど一目^{ひとめ}にて余^{まなこ}の眼^{まなこ}に映^{うつ}じ尽^{つく}せり、今思
 うに此時^{いま}の余^{あな}の眼^{めがね}は宛^{あたか}も写真^{しやうしん}の目鏡^{めがね}の如くなりし歟^か、眼^{めがね}より直^ちち
 に種^{たね}板^{いた}とも云^いう可^べき余^{あな}の心^{こころ}に写^{うつ}りたる所^{ところ}は最^いと分^{ぶん}明^{みやう}なるの
 みかは爾^じ後^ご幾^{いく}年^{ねん}を経^{くわ}たる今^{こん}日^{にち}まで少^{せう}しも消^けえず、余^{あな}は今^{いま}も猶^なお
 其^{その}時^{とき}の如^{ごと}く覚^{おぼ}え居^おれば少^{せう}しの相違^{さうゐ}も無^なく其^{その}室^{むろ}を描^えき得^えん、予^あ審判
 事^{こと}の書記^{しき}が寄^よれる卓^{ていぶる}子^この足^{あし}の下^{した}に転^まがりて酒^{さけびん}瓶^{びん}の栓^{せん}の在^ありし
 事^{こと}をも記^し臆^{おそ}し、其^{その}栓^{せん}はコロッツにて其^{その}一^{ひと}端^{たん}に青^{あお}き封^{ふうろう}蝋^{ろう}の存^{ぞん}した

る事すらも忘れず、此この後千年生延いきのびるとも是等の事を忘る可くも非あらず、余は真に此時まで斯かく仔細みに看て仔細みに心に留る事の出来ようとは自みら思みいも寄みらざりき、不意の事柄にて不意に此時現れたる能力なれば我が心の如何いかんくを詳わしく思おもいみ見る暇ひまも無なかりき。

我れと我が心に分らぬほど余は老人の死骸ちかづに近たき度たき望のぞみを起し自なら制おせんとして制し得ず、我心なよりも猶な強おき一な種の望のぞみに推おされ推おされて余は警官及び判事を初め書記や目科への此室やに在るをも忘れし程なり、彼等も別に余が事には心を留めざりしならん、判事は書記に差函を与え目科は警官と密ひそ々語らう最中なりしかば、余は咎とがめられもせず又咎とがめらる可しと思いもせず、最平いと氣に、最安心いとして、宛あたかも言附られし役目を行うが如くに泰然自若として

老人の死骸の許もとに行き、其傍そのそばに跪ひざまずきてそろ／＼と死骸を検査し初めぬ。

此老人歳は七十歳より七十五歳までなる可し、背低くして肉瘡やせたれど健康は充分にして随分百歳までも生延得る容体とし頭かみの髪けも猶なお白茶けたる黄色の艶を帯びて美しく、頬には一週間も剃かみそり刀を当ぬかと思うばかりに贅毛むだけの延たれど個こは死人よに能く有る例しにて死したる後急のちに延たるものなる可く余は開剖室かいぼうしつなどにて同じ類たぐいを実見せしこと度々たびくなれば別に怪あやしとも思わず唯ただ余が大おおに怪しと思いたるは老人の顔の様子なり、老人の顔附は最いと穩おだやかにして笑えみを浮めしとも云う可べく殊ことに唇などは今しも友達に向いて親密なる話を初はじめんとするなるかと疑わる、読者記憶せよ、老

人の顔には笑こそあれくるし苦みの様子は少しも存せざることを、是れ
 唯だた一ひとつき突に、痛みをも苦みをも感ぜぬ中うちに死し去りたる証拠な
 らずや、余は実に爾そう思いたり、此老人は突つかれてより顔を蹙しかむる
 間も無きうちに事ことぎれ切と為なりしなりと、若もし真に顔を蹙むる間も
 無かりしとせば如何いかにして MONIS 《モニシ》の五文字を其床そのゆかに
 書かきしる記せしぞ、死しぬるほどの傷を負い、其痛みを堪こらえて我生血いきちに指
 を染め其上にて字を書くとは一通りの事に非あらず、充分に顔を蹙め
 充分に相そうを頰くずさん、夫それのみか名を書くからには、死せし後にも此
 悪人を捕われさせ我が仇あだを復かえさんとの念あること必ひつじよう定なれば
 顔に恐ろしき怨みの相こそ現あらわるれ笑の浮はぼう筈はずばんく万々無く親友
 に話を初んとするが如き穩和の色の残ろう筈万々なし、今にも我

が敵に嚙かみつ附つんずる程の怒れる面めん色しよくを存すべき筈ならずや。

殊ことに老人の傷きず処しよを檢あめ見れば咽のどを一突いつにて深く刺れ「苦あつ」と

も云わずに死せしとこそ思われるれ、曲く者せものの去りたる後いまで生きな

存がえしとは認みむ可かならず、笑の浮みしは實際にして又道理なり、

血の文字を書きしとは、如何に考うるとも受取られず、あゝ余は

唯た是これだけの事に氣附きてより、後にも先にも覺おぼなき程ほどに打うち驚おどき

胸むねのうち俄にわかに騒さわぎ出いだして、轟どく動悸どうきに身も裂くるかと疑うわる。

去れば余は猶なお老人の傍そばを去る能あたわず、更に死体しがいの手を取りて

檢あらむるに、余の驚おどきは更に強つよきを加くえ来きたり、読者よ、老人の右

の手には少しも血の痕あとを見みず唯ただ左の手の人差指あかのみ紅あかく血まに塗ま

れしを見る、此老人は左の手にて血の文字を書きたりと云いう可べき

か、否いな、否、否、左りの手にて書かう筈なし余は最早もや我が心おさを抑ゆる能あたわず、我が言葉をも吐く能あたわず、身体あに満みち々たる驚おどきに、余は其外の事を思う能あたわず、宛あたも物かに襲おわれし人の如く一声せい高く叫なびし儘ま、跳はねあがりて突つ立たたり。

余の驚おどき叫なびし声には室中の人皆驚おどきしと見え、余が自ら我が声こゑを怪あみて身辺を見廻りし頃には判事はんじも警察官けいさつも目科めかも書記しきも皆余あの周圍まわりに立たち「何なにだ」「何事なにだ」「何どうした」「何どうしました」と遽あわただしく詰つ問とう声、矢やの如く余が耳みみを突つく、余は猶なお一語ひとことをも発はし得えず唯ただだ「あ、あ、あれ、あれ」と吃どもりつゝ、件くだんの死し体がに指さすのみ、目科めかは幾分いくぶんか余の意いを曉さとりしにや直すぐ様さま死し体がに重かさり掛かり其両ふた手てを検しらめ見て、猶ゆう予よもせずなに立た上あり「成なるほど、血ちの文字もじは此老人こゝろ

が書いたので無い」と言い怪む判事警察官が猶お一言も発せぬうち又踏みて死体の手を取り其左のみ汚れしを挙げ示すに、警官も此証拠は争われず「あゝ大變な事を見落して居たなア」と眩けり、目科は例の空煙草を急ぎて其鼻に宛ながら「好く有る奴さ一番大切な証拠を一番後まで見落すとは、併し老人が自分で書いたで無いとすれば事の具合が全く一變する、さア此文字は誰が書た、勿論老人を殺した奴が書たのだろう」判事と警官も一声に「爾とも爾とも目「愈々爾とすれば曲者が老人を殺した後で自分の名を書附けると云う馬鹿はせぬなら、此曲者は無論藻西で無いと思わねばならぬ、是丈は誰も異存の無い所だから、此断案は両君何と下さるゝか」警官は茲に至りて言葉無し、判事は深く考

えながら「爾さ、曲者が自分の名を書ぬ事は明かだ、書のは則ちすなわ自分へ疑いの掛らぬ為だから、爾だ他人たじんに疑いを掛けて自分が夫それを逃れる為めだから、此名前で無い者が曲者だ、吾々われは曲者の計略に載られて居たのだ、藻西太郎に罪は無い、爾とすれば本ほん統うの罪人は誰だろう警「爾さ誰だろう目「夫を見出すは判「目科君、君の役目だ」

斯かく一同の意見が全く一変せし所へ、宛あも外かより入い来りる一巡査は藻西太郎を捕縛に行きたる一いちにん人なる可し「唯今歸りました」の声を先に立て、第一に警察官の前に行き「命令通り夫々手を尽しましたうまが是ほど旨いく行いた事は有ません警「では藻西を捕縛したか、夫それは大変だが巡「はい手も無く捕縛して仕舞いました夫に彼

れ全く逃れぬ所を見てか不^{すつ}残^{かり}白状して仕舞いました警「や、や藻西が白状したとな」

第四回（白状）

罪なき人が白状する筈^{はず}なければ藻西太郎が白状せしと云うを聞き一同は言葉も出ぬまでに驚き果て、中にも余の如きは只^ただ夢かと思うばかりなりき、今まで余の集め得たる証拠^{すべ}は総て彼^かれの外^{ほか}に真^まの罪人あることを示せるに彼れ自ら白状したりとは何事ぞ、
斯^かる事の有り得べきや、人々の中^{うち}にて一番早く心を推^{おし}鎮^{しず}めしは

目科なり彼れ五六遍も鼻煙草の空箱を鼻に宛あてたる末、件すえくだんの巡査に
 打向いて荒々しく「夫それは全く間違いだ、お前が自分で欺されたの
 か爾さな無くば吾々を欺して居るのだ必ず其ふたつひとつ二に一だ巡「其そのよう様な事
 は有ません夫それは私しが誓います目「いや誓うには及ばぬ無だまつ言て居
 なさい、何でも藻西太郎の言た事をお前が間違て白状だと思たの
 か、夫それともお前が手柄顔に何も彼も分ツた様に言い吾々を驚かせ
 ようと思ツたのだ」此厳しき言葉を聞くまで最いと謙遜に構うごえたる
 巡査なれど今は我慢が出来ずと思いし如く横柄に肩を聳うご動し「へ
 え御免を蒙こうむりましょう、憚はづかりながら私しは其様な馬鹿でも無けれ
 ば嘘つきでも有ありません自分の言う事くらいは心得て居おりますから」
 と遣やりかえ返す、此儘に捨置なば二人の間に攫つかみ合も初かり兼かざる劍幕

なれば警察長は捨置かれずと思ひし如く割て入り「いや目科君待ち給え詳しく聞終つた上で無ければ分らぬから」と云い更に巡査に打向いて「さ事の次第を細かに述べ今一応説明ときあかして見ろ」と命じたり、巡査は此命を得て俄にわかに己の重きを増したる如く一寸と目科を尻目に掛け容ようだい体ぶりて説き始む「私しは貴官の命を受け検査官一名及び同僚巡査一名と共に、都合三名で、ビ、エン街五十七番館に住む飾物模造職藻西太郎と云う者をば、バチグノールの此家に住で居る伯父おじを殺したと云う嫌疑で捕縛の爲め出張致しました」警察長は、成る可べく彼れの言葉を切きりちぎ縮ちぢさせんと思う如く、将はた感心する如くに「其通り、其通り」と軽く頷うなず首く、巡査は益々力を得て「吾々三人馬車に乗り頓やがて其ビ、エン街に達し

ますと藻西太郎は丁度夕飯を初める所で妻と共に店の次の間で席に就^{つこ}うと仕^して居ました、妻と云うのは年頃二十五歳より三十歳までの女で実に驚く可き美人です、吾々三人引続て其家に入込みますと藻西太郎は斯^{かく}と見て直^{すぐさま}様何の用事だと問いました、問うと検査官は衣囊^{かくし}より逮捕状を取出し法律の名を以て其方を捕縛に参たと答えました「此長々しき報告を目科は聞くに得堪ずと思ひし如く「お前は要点だけ話す事が出来ぬのか」と迫^{せか}し立るに巡査は一向頓着せず、「私は今まで随分捕縛には出張しましたが、捕縛と聞て此藻西太郎ほど喫^{びつくり}驚したのは見た事が有りません、彼れは漸^{ようや}く我れに復りて其様な筈は有ません必ず誰かの間違いでしようと言しました、検査官が推^{おしかえ}返して決して人違いで無いと答えます

と夫それでは何の廉かどしで捕縛しますと問返しました、オイ何の廉など、其様な児供欺こどもだましを云いっても駄目だめだよ其方の伯父おじは何うどした、既に死骸が其筋の目に留り其方が殺したと云う沢山の証拠が有る其方に於いて覚え有う、と詰寄る検査官の言葉を聞て驚いたの驚か無いのと云まるて全度胸を失つて仕舞ました、何か言いうとするけれど其言葉は口から出よろめず蹠踉よろめいて椅子に倒れると云う騒ぎです、検査官は彼れの首筋を捕えて柔かに引起し今更彼是れ云うても無益だありてい有ありてい体に白状しろ白状するに越した事は無いと論さとしました、彼れは早や魂も抜けた様に成り馬鹿が人の顔を見る様に検査官の顔を見上してハイ何も彼も白状致します全く私わがしの仕した業わざですと答えました「警察長は聞来りて「能よく遣やった、能く遣た」と再び賛成の意

を示すに巡査は全く勝誇りて「私し共は素もとより出来るだけ早く事を終る所存です、成る可く人を騒がすなと云うお差図を得て居ましたが何時いつの間にか早や弥次馬ががや／＼と其戸口に集りましたから検査官は罪人の手を引立てさゝ警察署で待て居るから直に行こうと云いますと罪人はやツと立上り有ありだけの勇氣を絞り集めた声でハイ参りましたしようと答えました吾々は是で最もう何も彼も旨うまく行たと思て居ましたが実は彼れの背後うしろに女房の控えている事を忘れて居ました、此時まで藻西太郎の女房は氣絶でも仕たかと思わるゝほど静で、腕椅子に沈込んだまゝ一言も発せず居りましたが吾々が藻西を引立ようとする宛まるで女獅々の狂う様に飛立て戸の前に立塞がり、通しません茲こゝを通しませんと叫びましたが本統ほんとう

に凄^いい様でした、流石^{さすが}に検査官は慣て居るだけ静に制してイヤ内^な儀腹^{いぎ}も立うが仕方が無い其様な事をするだけ不為^{ふため}だからと云ましたけれど女房は仲々聴きません果^{はて}は両の手に左右の戸を捕え所天^{おつと}に決して其様な罪は無い彼に限ッて悪事は働かぬとか所天が牢へ入られるなら私しも入れて下さいとか夫はくく最う聞くも氣の毒なほど立腹し吾々を罵るやら誹^{そし}るやら、容易には取り相^{そう}も見えませんでしたが、何と云ても検査官の承知せぬのを見、今度は泣ながら詫をして何^どうか所天を許して呉れと願いました、氣の毒は氣の毒でも役目には代られませんから検査官は少しも動きません、女も終^{つい}には思い切^{きつ}たと見え所天の首に手を巻^まて貴方は此様な恐ろしい疑いを受けて無^{だま}言^{まつ}て居るのですか覚え^{ない}が無^なと言切てお仕舞い

なさい貴方に限て其様な事の無いのは私しが知て居ますと泣きつ
口説つする様に一同涙を催しました、夫だのに藻西太郎と云う奴
は本統に酷い奴ですよ、何うでしょう其泣て居る我が女房を邪
慳にも突飛しました、本統に自分の敵とでも云う様に荒々し
く突飛しました、女房は次の室まで蹠蹠て行て仆れましたが夫で
も先ア幸いな事には夫でいさくさも取りました、何でも女房は仆
れた儘氣絶した様子でしたが其暇に検査官は亭主を引立て直様
戸表に待せある馬車へと昇いで行きました、いえ本統に藻西を
昇いだのです彼れは足がよろ／＼して馬車まで歩む事も出来ぬの
です、え何と恐ろしい者じゃ有ませんか、我が悪事が早や露見し
たかと失望したので足が立なく成たのです、先々是で厄介を払

たと思つた所ろ女房の外に猶まだ一つ厄介者が有たのですよ、夫を何だと思ひます、彼れの飼かつて居る黒い犬です、犬の畜生女房より猶だ手に合ぬ奴で、吾々が藻西太郎を引立ようとするわんく　々と吠て吾々に食くらひ附つうとするのみか追ても追ても仲々聴ません、實に氣の強い犬ですよ、夫でも先まア味方は三人でしょう敵わづかは纔わづかに一匹の犬だから漸ようやくに追おい退のけて藻西を馬車へ引載ると今度は犬も調子を変え、一緒に馬車へ乗うとするので、夫も到頭追おっばら払いヤツとの事で引上る運びに達しましたが、其引上る道々も検査官は藻西太郎を慰めようとしませすけれど彼れ首こを垂れて深く考え込む様子で一言も返事しません、夫から警察本署へ着た頃は少し心も落着た様子でしたが、頓やがて牢の中へ入いれ入ますと、彼れ唯一人淋しい一

室へ閉籠られただけ又首を垂れあゝ何うしたんだなア本統にと繰返しく、呟きます検査官は之を聞て再び彼れの傍に近附て何うしたか自分で知つて居るだろう、愈々罪に服するかと問ますと彼れは爾ですと云わぬばかりに領首うなずきながら何うか独りで置いて下さいと云うのです、夫でも若しもや独りで置いて自殺でも企てる様な事が有ては成らぬと思ひ吾々は竊ひそかに見張つけを就て牢から退き、検査官と同僚巡査一人とは本署に残り私しが此通り顛末の報告に参りました」と世に珍しき長談議も茲こゝに漸ようやく終りを告げたり。

聞終りて警察長は「是で最う何も彼も明々白白だ」と呟き予審判事も同じ思いと見え「左様さよう、明々白白です、外に何どの様な事情が有あうとも藻西太郎が此事件の罪人と云う事は争われぬ」と云う、

余は実に驚きたれど猶お合点の行かぬ所あり横鎗を入んため將まさに唇くちびる頭を動さんとするに目科も余と同じ想いの如く余よりも先に口を開き「是これを明々白白とすれば藻西は伯父を殺した後で自分の名を書附て行た者と思わねばならぬ、其様な事は何うも無い筈はずだが、警「無そさ相そうでも好よいじや無いか当人が白状したと云えば夫から上確な事は無い、成るほど血の文字が少し合点が行かぬけれど是も当人に篤とくと問えば必ず其訳が分るだろう、唯吾々が充分の事情を知らぬから未まだ合点が行かぬと云う丈の事」判事は目科の横鎗にて再び幾分の危あやぶむ念を浮べし如く「今夜早さつそく速牢屋へ行き篤とくと藻西太郎に問といた糺たゞして見よう」と云う。

是これにて判事は猶なお警察長に向い先刻死骸検査の為ため迎むかえに遣やりた

る医官等も最早もはや来るきたに間も有るまじければそれ夫まで茲こゝに留とゞまれよ
 と頼み置き其身は書記及び報告に來し件くだんの巡査と共に此家より引
 上げたり、後に警察長は予審判事の頼みに従いて踏ふみとゞ留まりは留
 りしかど最早夕飯の時刻なれば、成る可く引上げを早くせんと思
 いし如くそろ／＼しつちゆうひきだし室中の抽斗及び押入等に封印を施し初めぬ。

余と目科兩人は同じ疑いに心迷い顔見合せて立つのみなりしが、
 目科は徐々そろ／＼と其疑いの鎮まりし如く「爾そうさなア、矢張り血の文
 字は老人が書たのかも知れぬ」余は忽ち目を見開き「老人が左の
 手でかね、其様な事が有うか夫それに老人が唯一たゞひとつき突で文字などを書
 く間も無く死しんだ事は僕が受合まじわう」あゝ余と目科との間柄は早きみや君
 僕ぼくと云う程の隔て無まじわき交りなと為れり目「全く相違ないのかね余

「傷から云えば全く爾そうだよ、今に検査の医者も来るだろうから問うて見たまえ、尤もつとも僕は猶なお卒業もせぬ書生の事だから当あてには成らぬかも知れぬが医官に聞けば必ず分る」目科は又も空箱を取出しながら「此事件には猶まだ吾々の知らぬ秘密の点があるに極きまツて居る、其点を検めるが肝腎それだ夫を検めるには是から更に詮策を初めねばならぬが、爾そうだ更に初めても構いはせぬなア面白い初めようじや無いか好よしく、其そのつもり積たまで先まず第一に此家の店番を呼び問といたゞ正いたゞして見よう」斯こうい云いて目科は梯子段はしごだんの際きわに行き、手欄てすりより下階したを窺のぞきて声を張上げ店番を呼立たり。

第五回（種々の証拠）

店番の来るまでにて目科は更に犯罪の現場の検査を初め、中にも此室このみやの入口の戸に最も深く心を留めたり、戸の錠前は無傷にし、て少しも外より無理に推開きたる如き痕あと無ければ是これだけにて曲くせ者が兎とにも角かくにも老人と懇意こんいの人なりしことは確たしかなり、余は又目科が斯かく詮鑿せんさくする間に室中を其方そち此方こちと見廻して先に判事の書記が寄りたる卓子てえぐるの下にて見し彼のコロップの栓を拾い上げたり、要ようも無き唯ただ一個ひとつの空瓶の口なれば是が爾さまでの手掛りに為なろうとは思わねど少しの手掛りをも見落さじとの熱心より之も念の為にとて拾い上げしなれ、拾い上げて検あらた見みるに是れ通常の酒瓶の栓

にして別に異りし所も無し、上の端には青き封蠟の着きし儘にて
 其真中に錐をもみ込し如き穴あるは是れ螺旋形のコロツプ抜にて
 ひきぬき引抜たる痕なるべし、尤も護謨同様に紳縮みする樹皮なれ
 ば其穴は自ら塞がりて唯だ其傷だけ残れるを見るのみなれば更に
 覆えして下の端を眺れば茲には異様なる切創あり、何者が何の
 為にコロツプの栓の裏に斯る切創を附けたるにや、其創は最鋭き
 刃物にて刺したる者にて老人の咽を刺せし兇刃も斯る業物
 なりしならん、老人の咽を突きしも此コロツプを突き如くに突し
 にや、斯く思いて余はゾツと身震いしつ、其儘持行きて目科に
 示すに彼れ右見左見打眺めたるすえ「コレハ大変な手掛だ」と
 云い鼻煙草の空箱を取出す間も無く喜びの色を浮べたれば、余は

何故なにゆえ是が大變の手掛りなるやと怪みて打問うに彼れ今も猶なお押
 入其他の封印に忙わしき彼の警察長を尻目に見、彼れに何事も聞
 えぬ様小声にて説明ときあかす「何故だツて君、此コロツプは曲者が捨
 て行たのでは無いか、先まず此傷を見給え此傷を、是は確に老人を
 刺した刃物で附けたのだ」余も同じく小声にて「何の為に目「何
 の為に、其様な事を聞く奴が有るものか、曲者は余程鋭いもろは両刃の
 短剣を持て来たのだ、両刃と云う事は此傷の形で分る、傷の中程
 が少し厚くて両の縁ふちが次第に細く薄く成て居るじや無いか余「成
 るほど爾そうだ目「爾さすれば此鋭利い短剣を曲者は何どうして持て来たゞ
 ろう、人に見られぬ様に隠して居たのは明かだ、さア隠すなら何ど
 所こへ隠す、着物の衣囊かかしとか其他先ず自分の身うちの中には違ちがい無いが

其銳利するどいものを身の中へ隠すのは極めて險けん呑だ、少し間違えば、自分の身に怪我をするか或は又劍きつさき先の刃を欠くと云う恐おそれが有る、して見れば何かで其劍先を包んで置かねばならぬ、さア何で包んだ、即ち此コロツプだろう、コロツプは柔やわらかで少しも刃を傷める患うれいが無いから夫それで之をそツと其劍先へ刺込で衣囊かきへ入れて来たのだ余「説き得て妙目「老人を突く時に此コロツプを外したが後では最もう誰にも認められぬうち早く立去ろうと思うからコロツプなどは打忘れて歸たゞろう余「成るほど目「所ところで比コロツプには青い封蠟が附いて居るから何か一種の銘酒の瓶に用いて有ツたに違ちがい無い、斯かく段々推して行けば次第に搜すのも易くなる、何にしる此コロツプは大変な手掛だ、是が手に入る以上は僕必ず曲者を

捕えて見せる」と云い終おわりて其コロツプを衣か囊くしに入るに此所へ入
 来るは別人ならず今しも目科が呼置きたる此家の店番にして即ち
 先刻余と目科と此家に入込しとき店先にて大勢の店子等たなこらに泡を吹
 きつゝ話し居たる老女なり、女「何御用か知ませんが少々用事も
 有ますので余りお手間の取れぬ様に願います」と云いつゝ老女は
 目科の差出す椅子に寄れり、目科は何所どこと無く威光高き調子を現
 わし「少し聞度きい事たが有るので、是から一々お前に問うから何も
 彼も腹臆なく答えぬと返てお前の不為ふためだよ女「はい心得ました」
 目科は判事の尋問する如く己れも先ず椅子に寄りて「殺された老
 人の名は何と云う、女「梅五郎ばいごろうと申もうしました目「何時いつから此家このいえに
 住で居る女「はい八年前から目「其前は何所どこに住だ女「夫それまでは

リセリウ街まちで理髪店を開いて居ました、老人は理髪師で身代しんだいを作ツたのです目「何れほどどの身代が有る女「確たしかには知ませんが老人の甥が時々申ますに伯父は命を取られると云う場合には随分百フランクフランク万法くらいは出し兼ねと云いました」目科は心の中にて「ふゝむ予審判事は何かの書面を頻しきりと書記に写させて居たから梅五郎の身代を残らず調べ上て行たと見えるな」と打うちつ 呟つぶき更に又老女に向い「して梅五郎老人は平へい生せい何どの様な人だツた女「極ごく々の善人でした、尤もつとも少し我わがま儘まで剛情な所は有ましたが高ぶりは致しません、少し機嫌の能よい時は面白い事ばかり言て人を笑せました、爾そでしようよ流行社会の理髪師で巴里中ぱりの美人は一人残らず彼の人の手に掛ツて髪をくねらせて貰あツたと云う程ですもの目

「暮し向は女」「先ア当前ですnee、自分で儲溜めた金で暮す人には丁度相当と思われる暮し方でした、夫かとして無駄使などは決して致しませんでしたが目「夫だけでは確と分らぬ何か是と云う格別な所が有そうな者だ女」「有ますとも老人の室の掃除向と給仕とは私しが引受けて居ましたもの、大層甲斐々々しい老人で室の掃除などは大概一人で仕舞い私には手を掛させぬ程でした、何がなし暇さえあれば掃たり拭たり磨たり仕て居るが癖ですから目「給仕の方は女」「給仕の方は毎日昼の十二時を合図に私しがお膳を持って来るのです、夫が老人の朝飯です、朝飯が済でから身仕度するが凡そ二時まで掛ります、大層着物を被るのが八かましい人で毎でも婚礼の時かと思うほど身綺麗にして居ました、身仕度

が終ると家を出て宵の六時まで散歩し六時に外で中食を済せ、夫から多くはゲルボアの珈琲館に入り昔友達と珈琲を呑んだり歌牌を仕たりして遅くも夜の十一時には帰て来て寢床に就きました、ですが唯た一つ悪い事にはあの年に成て猶だ女の後を追掛る癖が止みませんから私しは時々年に恥ても少しは謹むが好らうと云いました、ですが誰でも落度は有る者で夫に若い頃の商売が商売で女には彼是れ云れた方ですから言えば無理も有りますまいが」と云い少し笑いを催し来れど目科は極めて真面目にて「して梅五郎の許へは沢山尋ねて来る人が有たのか女「はい有ツても極極僅かです其うちで屢々来るのが甥の藻西太郎さんで、土曜日の度には必ず老人に呼ばれてラシウル料理店へ中食に行きました目

「甥と老人との間柄は女」「此上も無く好い仲でした目」「是までに
 言争いでも仕た事は女」「決して有りません、尤もお倉くらさんの事に
 就ては両方の言う事が折合ませんですけれど目」「お倉さんとは誰
 の事だ女」「藻西太郎さんの細おかみさん君です、実に奇麗な女ですよ。
 あの様なのが先まア立派な女と云うのでしよう、夫それに外に悪い癖は
 有りませんけれど其お倉さんも大變な衣服なりどうらく蕩樂で藻西太郎さんの
 身代に釣あわぬほど立派な身姿みなりをして居ますから綺きりよう倆が一層引
 立ちます、ですから全体云えば老人が大層誉め無ければ成らぬ筈
 ですのに何どう云う者か老人は其お倉さんが大嫌いで藻西太郎さん
 に向ッては手前は女房を愛し過る今に見ろ女房の鼻の先で追使わ
 れる様になるからとか、お倉は手前の様な亭主に満足する女じゃ

無い、今に見ろ何か間違いを仕出来すからとか其様な事ばかり言
て居ました、爾々そうく夫ばかりでは有りませんよ昨年も老人とお倉
さんと喧嘩をした事が有ます、お倉さんは亭主やどに或あ飾かざり屋みせの
株を買せるからと云い老人に大變な無心を言て来たのです、する
と老人は一も二も無く跳はねつけ附て、己おれが死んだ後では己の金を藻西
太郎が何どの様に仕ようと勝手だけれど兎角とも己の稼とぎ溜とた金だか
ら生て居る間は己の勝手にせねば成らぬ、一文でも人に貸して使
わせる事は出来ぬなんぞと言しました」読者よ余の考えにては此点
こそ最も大切の所なれば目科が充分に問詰るならんと思ひしに彼
れ意外にも達たつて問返さん様子なく余が目配めくばせするも知らぬ顔にて
更に次の問題に移り「したが老人の殺されて居る所は何どうして見

出した女「何うしてとは、夫は私しが見出したのですよ、先^まあ何うでしょうお聞下さい私しは毎^{いっ}もの通り十二時を合図に膳を持って老人の室まで来、兼^{かね}て入口の合鍵を渡されて居る者ですから何気なく戸を開て、内へ這^{はい}入て見ますると、可哀相に、此有様です」と言^い来^{きた}りて老女は真実憫^{あわ}れに堪えぬ如く声を啜^すりて泣出せしかば目科は之を慰めて「いやお前^{まへ}が爾^そまで悲むは尤もだが、最^もう時が無い事で有るし先^さず悲みを堪^こえて——女「はい堪えます、堪えます目「私^わの問う事に返事を仕て、さゝ、夫から何うした、其老人の死骸を見て其時お前は何と思ツた女「何と思わ無くとも分ツて居ます、甥の畜生が伯父^{おじ}の死^しぬのを待兼て早く其身代を自分の物にする気になり殺したに極て居ます、私しは皆に爾^そ云て遣^やまし

た目「併しかし、何故其甥が殺したに極て居る人を人殺しなど、云うは実に容易の事で無く其人を首切台へ推おしのぼ上すも同じ事だ、少し位は疑ツても容易に口にまで出して言触す事の出来る者で無い、夫くらいの事はお前も知て居るだろう女「だツて貴方あなた、甥で無くて誰が殺しましたよう、藻西太郎は昨夜老人に逢あひに来て、歸て行たのは大おおかた方夜の十二時でした、毎いっも来れば這入がけと歸掛かえりがけとに大抵私しへ声を掛る人ですのに昨夜に限り来た時にも歸る時にも私しへ一言の挨拶をせぬから私しは変だと思て居ましたよ、何しろ昨夜其甥が歸てから今朝私しが死骸を見出した時まで誰も老人の室へ這入ツた者の無いのは確かです夫は私しが受合べいます」

読者よ是だけの証言を聞き余は驚かざる可べき乎か、余は実に仰天

したり、余は此時猶お年も若く経験とても積ざれば、最早や藻西太郎の犯罪は警察官の云し如く真に明々白白にて此上問うだけ無益なりと思いたり去れど目科は流石経験に富るだけ、且つは彼れ如何に口重き証人にも其腹の中に在るだけを充分吐^{はきつく}尽させる秘術を知れば猶お失望の様子も無く宛も^{あたか}独^{ひとりごと}言を云う如き調子にて「成る程昨夜藻西太郎が老人に逢^{あひ}に來た事は最^もう確だな女「確かですとも、是ほど確かな事は有ません目「するとお前は藻西を見たのだね、其顔を確^{しつかみとめ}り認たのだね女「いえ少しお待なさい、見たと云て顔を見た訳では有ません廊下へ行く所を見たのです、夫も彼れ急いで歩きましたから、何でも私に目^{みと}認められまいと思う様に本^{ほんとう}統に憎いじや有ませんか廊下の燈^{あかり}明が充分で無いのを幸

いちよいくと早足に通とお過りました」余は此一節ふしを聞きて思わ
 ず椅子より飛離れたり、是れ実に軽々しく聞過し難き所ならん、
 余は殆ど堪え兼かたて傍わらより問を発し「若もし夫だけの事ならばお前が
 確に藻西太郎と認めたと云われぬじや無いか」老女は最怪いあやしげに
 余を頭の頂てつ辺ぺんより足の先まで隈くまなく見終り「なに貴方、仮令たと当
 人の顔は見ずとも連て居る犬を確に見ましたもの、犬は藻西に連
 られて来る度たびに私しが可愛たがひがツて遣やりますから昨夜も私しの室へ
 来たのです、だから私しが余あまりもの物ものを遣やうとして居ると丁度ちやうど其
 時藻西が階段の所から口笛で呼あわましたから犬は泡あわ食くて三階へ馳は
 上せッあがして仕舞ました」此返事を目科は何と聞きたるにや余は彼れ
 の顔色を読まんとするに、彼れ例の空箱にて之を避よけ「して藻西

の犬とは何の様な犬だ」と老女に問う女「はい前額ひたいに少し白い毛
 が有るばかりで其外は真黒な番犬ばんいぬですよ、名前はプラトと云ま
 してね、大層気むずかしい犬なんです、知ぬ人には誰にでも嘈うな
 ますが唯私ただには時々食う者を貰う為め少しばかり穏おだやかです、藻
 西太郎より外の者の云う事は決して聴きません」是こゝだけ聞きて目
 科は「夫で好し最もう聞く事は無いからお前下るが好い」と云い老
 女が外の戸まで立去るを看送みおくり済すまし更に余が方かたに打向いて「最もう
 何どうしても藻西太郎の仕業しわざと認める外は無い」と嘆息たんそくせり。

目科が猶お老女を尋問し居たるうちに、先刻判事が向いに遣やり
 と云いたる医官二名出張し来りて此時までも共とも々々／＼に手を取り
 て老人の死骸あらかたを検め居たれば余は一方に氣の揉める中うちにも又一方

に医官が検査の結果如何と殆ど心配の思いに堪えず、凡そ医師二人以上立会うときは十の場合が七八まで銘々見込を異にする者なれば若し此場合に於ても二人其見る所同じからず、縦し一方が余の見立通り老人は唯一突にて痛を感じる間も無きうちに事切れたりと見定むるとも其一方が然らずと云わば何とせん、青書生の余が言葉は斯る医官の証言に向いては少しの重みも有る可きに非ず、斯思いて余は二人の医官を見較ぶるに一方は瘖せて背高く一方は肥て背低し斯も似寄たる所少き二人の医官が同様の見立を為すは殆ど望み難き所なれば猶お彼等の言葉を聞かぬうちより既に失望し居たる所、彼等は頓て検査し終り、今まで居残れる警察長に向い不思議にも同一の報告を為したり、同一の報告とは他なら

ず梅五郎老人は唯一突にて即死せし者なれば従つて血の文字は老人の書し者に非ずと云うに在り。

余は意外にも二人の医官が二人ながら余の意見と同一の報告を為せしを見、ほつと息して目科に向えば目科は益々怪しみて決し兼たる如く「フム老人が書たで無いとすれば誰が書たのだろう、藻西太郎か、藻西太郎が自分で自分の名を書附て行くと云う事は決して無い、無いく何うしても無い、自分で自分の名を書くとは余り馬鹿げ過て居る」

余は此言葉に何の批評をも加えねど、己が役目の漸く終り、やつと晚餐に有附く可き時の来りしを歡びながら出でいで行く彼の警察長は目科の言葉を小耳に挟み彼れをからかうも一興と思ひし如く

「当人が既に殺しましたと白状した後で他人の君が六かしく道理を付け独り六かしがツて居るのは夫こそ余り馬鹿さが過るじや無いか」目科は怒りもせず「左様、馬鹿さが過るかも知れぬ、事に由ると僕が全くの馬鹿かも知れぬ、けれども今に判然と合点の行く時が来るだろうよ」警察長は聞流して帰り去り、目科も亦言流して余に向い出し抜に「さア是から二人で警察本署へ行き、捕われて居る藻西太郎に逢て見よう」

第六回（犬と短銃）

藻西太郎に逢て見んとは素より余の願う所ろ何かは以て躊躇う
 可き、早速目科に従いて又もや此家を走り出たり、余と云い目科
 と云い共に晚餐前なれど唯此事件に心を奪われ全く饑を打忘れて
 自ら饑たりとも思わず、只管走りて大通りに出で茲にて又馬車
 に飛乗りゼルサレム街に在る警察本署を推して急せたり目科は馬
 車の中にて心一方ならず騒ぐと見え、引切なしに空の煙草
 を鼻ぐ真似し時々は「何うしても見出せねば、爾だ何うしても見
 出して呉れる」と打眩く声を洩す、余は目科に向いて馬車の隅に
 すくみしまゝ、一つは我が胸に浮ぶ様々の想像を吟味するに急わし
 く一は又目科の様子に気を附けるが忙わしさに一語だも発するひ
 ま無し、目科は又暫し考えし末、忽ち衣囊を探りて先刻のコロッ

プを取出し宛も初めて胡桃を得たる小猿が其の剥方を知ずして
空く指先にて拵り廻す如くに其栓を拵り廻して「何にしても此青
い封蠟が大変な手掛りだ何うかして看破らねば」との声を洩せり、
斯て長き間走りし末、馬車は終に警察本署に達し其門前にて余等
二人を卸したり、日頃ならば警察の庭と聞くのみも先ず身震する
方にして仲々足踏入る心は出ねど今は勇み進みて目科の後に従い
入るのみかは常に爪弾せし探偵吏の、良民社会に対して容易
ならぬ恩人なるを知り我が前に行く目科の身が急に重々しさを増
し来り、其背長さえ七八寸も延しかと疑わる、即て其広き庭より
廊下へ進み入り曲り曲りて但有る小室の前に出れば中には二
三の残り員、卓子を囲みて雑話せるを見る、余は小声にて目科を

控え「今時分藻西太郎に逢う事が出来ようか」と問う、目科は

「出来るとも僕が此事件の詮鑿を頼まれて居るでは無いかたと仮令い

夜の夜半よなかでも必要と認めれば其罪人に逢い問といたゞ糺す事を許されて居

る」と云い余を入口に待せ置き内に入りて二言三言、何事をか残の

こりいん員と問答せし末、出いできた来りて再び余を従えつ又奥深く進み行

き、裏庭とも思わるゝ所に出で、そを横切りて長き石廊に登り行

詰る所に至れば嚴いかめしき鉄門あり、番人に差さしず図して之を開かせ其

内に踏み入るに是が牢屋の入口なる可く左右に広き室ありて室に

は幾人の巡查集れるを見る、室と室との間に最い険とけしき階段あり之

を登れば廊下にして廊下の両側つらに列なれる密室ことは悉く是れ囚舎ひとやな

るべく其戸に一々逞ましき錠を卸せり、廊下の入口に立てる一人、

是が世に云う牢番ならんか、兼かねて小説などにて読みたる剛こわらしき人とは違い存外に氣も軽げなれど役目が役目だけ真面まじめには構えたり、此者目科を見るよりも腰掛を離れて立ち「やア旦那ですか、多分いら入ツしやるだろうと思ツて居ました何でもバチグノールの老人を殺した藻西とか云う罪人にお逢ない成なるのでしようね目「爾そだ、何か其藻西に變かツた事でも有あるのか牢番「なに變かつた事は有りませんが唯たツた今警察長がお見みえに成り彼れに逢あつて歸たばかりですから目「夫それだけで能よく己の來たのが藻西に逢あう為めだと分わつたな牢番「いえ夫だけでは有ありません、警察長は僅か二三分囚人と話わて歸り掛かけにアノ野郎言張げて見る氣力さえ無い、斯こう早く罪に服くそうとは思おわなんだが是もで最もう充分だ今に目科が遣きて來きて彼奴きやつの言立ことばを

聞き失望するだろうと何か此様な事を呟いて居ましたから」目科は之を聞き扱さては罪人早はや既に爾そうまで罪に服したるやと驚きしものゝ如く、鼻煙草を取出す事すら打忘れて牢の入口を鋭く見遣みやれり、牢番は目科の様子に気を留ずして言葉を続け「成るほどあれでは服罪しましょう、私わたしは一目見た時から此野郎とて迎も言いいひらき開は出来まいと思いましたが目「して藻西は今何をして居る番「私しは役目通り今まで彼れを窺のぞいて居ましたが、彼れ疾とくに後悔を初めたと見え泣て居ますよ、宛まるで身体の大きい赤坊です、声を放ツて泣て居ます目「何どれ行て見よう、だが己われの逢て居る間、外で物音をさせては了いけないよ」と注意を与え目科は先ず拔足して牢の所に寄り窺ひそかに内を窺い見る、余も其例に従うに成る程囚人藻西太郎は

寢台ねだいの上に身を投げて俯伏うつぶせしまゝ牢番の言し如く泣沈ていめる体にして折々に肩の動くは泣じやくりの為なるべく又時としては我身の上の恐ろしさに堪えぬ如く総身そうしんを震わせる事あり、見るだけにても氣の毒なり、良やありて目科は牢の戸を開かせつ余を引連れて内に入る、藻西太郎は泣止みて起直り、寢台の上に身を置きしまゝ目科の顔を仰ぎ見るさま、痛く恐を帯びたるか爾さなくば氣拔せし者なり、余は目科の背後うしろより彼れの人と為なりを備つく々見るに歳は三十五より八の間なる可べく背は並よりも寧むしろ高く肩広くして首短し、執いれにしても美男子と云わるゝ男には非ず、美男子を遙か離れ、強ほうき疱痘あとの痕ありて顔の形痛く損ひし其額ひたい高きに過ぎ其鼻長きに過るなどは余ほど羊に近寄りたる者とも云う可し、去さ

れど其眼そめなこは穩和なごげにして齒は白く且揃かついたり。

目科は牢に入るよりも大おおに彼れが氣を引立んとする如く慣なれ々々しき調子にて「おやおや何うしたと云うのだ、其様に鬱ふさいでばかり居ては仕様が無い」と云い彼が返事を待つ如く言葉を停めしも彼れ更に返事せざれば目科は猶なお進み「え、奮発するさ奮発を、これさこれ藻西さんお前も男じや無いか、私わしが若もしお前なら決して其様に凋しおれては居無いよ、男の氣象きしょうを見せるのは此様な時だろう、何でお前は奮発せぬ、茲こゝで一つ我身に覚えの無い事を知せ判事や警察官に一ひと泡吹あわせて呉くれようじや無いか」実に目科は巧なり彼れが言葉には筆に尽せぬ力あり妙に人の心を動かすに足る、余若し罪人ならば唯ただ彼れの一言に奮たい起たきた仮令たとい何れほどの疑い

に囲まれようともし其の疑いを蹴散して我身の潔白を知らせ呉れんと
励み立つ所なり、爾さは云え目科は氣も氣に非ず、此一言実に藻西
太郎の罪あるや無きやを探り尽す試験なれば胸の中うちい如何かほどか騒さ
立わだつやらん、藻西太郎は意外にも、無愛想なる調子にて「爾そ仰おつし
有やつても仕方が有りません、自分で殺した者は到底隠し切きれませ
んから」と答う、此返事に余は殆ど腰拔すほど驚きたり、あゝ当
人が此口調では最早や疑いを容いるゝ余地も無し問うも無益、疑う
は猶なお駄目なり、爾れど目科は猶くじお挫けず「何だとお前が殺した、
本統か、本統にお前か」藻西太郎は忽こつぜん然ぜんとして、宛あも狂人かが其
狂氣の発したるとき、将まさに暴れんとして起たつが如く、怒れる眼まなこに朱
を濺そぎ口角に泡を吹きて立上り「私しです、はい私しです、私し

一 いちにん 人で殺しました、全体何度同じ事を白状すれば好いのですか、
 今し方も判事が来て、同じ事を問うたから何も彼も白状しました、
 へい其白状に調印まで済せました、此上貴方は何を白状させ度たく
 て来たのですか、夫とも私が泣いて居るから信しんせつ切きつに夫を慰めよ
 うとて来て下さったのかも知ませんが、今と為なつては恐しくも有ま
 せん、首切台は知て居ます、はい私しは人を殺したから其罪で殺
 されるのです」彼れの言いひ条じょうは愈いよく々く出いでて愈々明白なり、流石さすが
 の目科も絶望し、今まで熱心に握み居たる此事件も殆ど見限りて
 捨んかと思ひ初めし様子なりしが、空箱を一たび鼻なに当あたりて忽たちまち勇
 気を取留し如く、彼の心を知る余にさえも絶望の色を見せぬうち
 早くも又元に復かえり「爾そうか、本統にお前が殺したのか、夫にしても

猶^まだ首切台ノ殺されるノと其様な事を云う時では無いよ、裁判と
 云う者は少しの証拠で人を疑うと同じ事で其代り又少しでも証拠
 の足らぬ所が有れば其罪を疑うて容易には罪に落さぬ。好いか、
 此度の事件でもお前の白状は白状だ、夫にしてもお前の白状だけ
 では足りぬ、猶^なお其外の事柄を能^よく調べて愈^い々^{よく}お前に相違ないと
 見込が附けば其時初めて罪に落す、若しお前の白状だけで外の証
 拠に疑わしい所が有れば情^じ状^{よう}酌^く量^{しやくり}と云て罪を軽める事も
 有り又証拠不充分と云て其儘^{そのま}許す事も有る」と殆^{ほとん}ど嚙^{かん}で食^ふめぬ
 ばかり諄^{じゆん}々^くと説^と諭^{きさ}すに罪人は心の中に得も云えぬ苦しみを
 感じ右^とせんか左^{かく}答^{こた}えんかと独り胸の中に闘いて言葉には得^{えい}出^ださぬ
 如く、空しく長き嘈^{うめ}き声を洩すのみ、此有様^そ抑も如何ように見て

取る可きか、目科は隙すかさず突つて入り「就つて問と度い事が有る、お前
 は殺すほどあの伯父が憎かつたのか藻「なアに少しも憎くは有ま
 せん目「では何故殺した藻「伯父の身しん代だいが欲いから殺しました、
 此頃は商しょう買ばいが不景氣で日に々ち々ち苦しくなるばかりです、夫は同
 業に聞ても分りません、幸い伯父は金持ですけれど生て居る中は一
 文でも貸て呉れず、死しさえすれば其身代ひが独ひとりで私しへ転がり込む
 と思ひまして、目「分つた、夫でお前は殺しても露見しま
 いと思つたのか藻「はい爾そう思ひました」あゝ目科は何なに故ゆえに斯かくも湿し
 濃つく問うなるや、余は必ず深き思惑の有る可しと疑い初そめしに果
 せるかな彼たちれ忽ちち語調を變じ「夫は爾そうとしてお前あの、伯父を殺
 した短び銃すは何所どこで買かつた」余は藻西が何と答うるにやと殆きど氣づか

遣^わしさに堪えず手に汗を握れども藻西は驚きもせず怪みもせず

「なに買ったんじや有ません余程前から持て居たのです」と答う目
「殺した後で其短銃を何うしたか藻「え、別に何うもしません、

左様さ投捨て仕舞いました、外へ出てから目「では誰か拾た者が
あろう、好しく私^{わし}が能く探^よさせて見よう」読者よ目科は奥の奥
まで探り詰ん為め故^{ことさらか}に斯^いる偽りの問^{つわ}を設けて、試みながらも其色
を露^{あら}現わさず相も変らぬ静かなる顔付なり、稍^やありて又問掛け

「一つ合点の行かぬ事は全体犬を連れて行くと云う事は無いよ、あ
れが大変な露見の本^{もと}に成^{なつ}た、あの様な者は内へ置いて自分一人で行
き相^{そつ}な者だツたのに」此問は何の意にて発せしや余は合点し得ざ
れども何故か藻西太郎は真実に打驚き「え、え、犬、犬を目「爾

よ、プラトと云う黒犬をさ、店番が慥たしかにプラトを認めたと云う事だ」此語を聞きて藻西太郎の驚きは殆ど譬たとうるに者も無し、彼れ驚きしか怒りしか齒を噛み拳こぶしを握りて立ち、何事をか言出さんとする如く唇屢しばしば々動きたるも漸ようやくに我心を推おし鎮しずめ「え、え」と悔しげなる声を発して其儘寢台に尻餅しりもち搗つき「え、え、是でさえ最もう充分の苦みだのに此上、此上、何事も問うて下さるな、最どう何どう有ても返事しません」断乎だんことして言放ち再び口を開かん様子も見えず、目科も此上問うの益なきを見て取りしか達たつて推問おしとわんともせず、是にて藻西太郎を残し余と共に牢を出で、階はしを下りて再び鉄の門を抜け、廊下を潜り庭を過よぎり、余も彼れも、無言の儘にて戸表おもてへと立出しが余は茲こゝに至りて我慢も仕切れず、目科の腕に

手を掛けて問う「是で君は何と思う、え君、彼れ自分で殺したと白状して居るけれど伯父が何の刃物で殺されたか夫さえも知ぬじや無いか、君が短銃びすとるの問は実に甘かつたよ、彼は易々やすくと其計略に落ちた、今度こそ彼れの無罪が明々白々と云う者だ、若し彼れが自分で殺したなら、なに短銃びすとるで無い短剣だつたと云う筈だのに」目科は簡単に「左様さ」と答えしが更に又「併し何方しか どちらとも云れぬよ罪人には随分思いの外に狂言の上手な奴が有て、判事や探偵を手球てだまに取るから余「だつて君目「いや〜僕は今まで色々な奴に出でつくわ会したゞけ容易には少しの事を信ぜぬて、併し今日しかの詮索は先ず是だけで沢山だ、是から帰て僕の室へ来、何か一口喫たべ給え、此後の詮索は明日又朝から掛るとしよう」

第七回（馬鹿か、否いな）

是より目科が猶も余を背後うしろに従え我宿に帰着き我室の戸を叩きしは夜も早や十時過なりき、戸を開きて出迎える細君は待兼し風情にて所天おっとの首にすがり附き情深きキスを移して「あゝ到頭とうとうお歸になりましたね今夜は何だか氣に掛りました」と言掛けて余が目科の背後うしろに在るを見、忽ちたちま一步引下り「おゝ御一緒に、今まで珈琲館いらいらに居しツたのですか、私しは又用事で外へお廻りに成たかと思ひました、遊あそんでお歸り成なるには余り遅過るじや有ませんか」

歸りの遅きは用事の為とのみ思いたるに余と一緒になるを見て扱さは
 遊びの為なりしかと疑い初めたる者と知らる、目科は隙すきも有らせ
 ず「なに珈琲館を出たのは六時頃だツたがバチグノールに人ひと
 殺ころしが有たので隣室の方と共に其方そのほうへ廻まわッて夫故それゆえ此この通とおり」
 と言開く、細君は顔色にて偽りならぬを悟りし乎か、調子を変て
 「おや爾そう」と呟つぶけり、此短みき「おや爾」には深き意味ある如く聞
 ゆ「おやく、探偵を勤めて居ることを隣の方にまで知せたので
 すか」と云うに同じかる可べし、目科は直ちに其意を汲くみ「隣の方
 と一緒に構わぬよ、探偵を勤めるが何も恥では有るまいし」と
 言い掛るを細君が「なに爾では有りませんよ」と鎮しずんとすれど耳
 に入れず「成る程世間には探偵を忌嫌いみきらう間違あッた人も有あうけれ

ど一日でも此巴里ぱりに探偵が無かつて見るが好い悪人が跋扈ばっこして巴里中の人は落々おちく々眠る事も出来ぬからさ、私は探偵の職業を誰に聞せても恥と思わぬ」とて喋々ちようく言張んとす、細君は斯かる瞋いかりに慣たりと見え一言も口をはさまず、目科も頓やがて我言葉の過たるを悟りし如くがらり打解て打笑い「いや其様な事は何うでも好い、夫より先まア、二人とも空腹に堪えぬから何なりと喫たべるものを」と云う、不意の食事は此職業には有りがちなれば細君は騒さわぎもせず庖くりやかたの方に退きて五分間と経へぬうち早や冷肉の膳を持出で二人の前に供したれば、二人は無言むげんの儘忙いそわしく喫たべべ初めしも、喫たべて先ず脾ひだるさの鋒先だけ収まるや徐々そろくと話に掛り、目科は今宵の一条を洩さず細君に語り聞かす流石探偵の妻だけに細君も素人臭くき

聞手と違ひ時々不審など質問する孰れも能く炙所に当れば余
 は殆ど感心し「此の聞具合では必ず多少の意見も有るだろう」と
 窃に思待つうちに、漸く目科の話が終れば果せるかな細君は第
 一に「貴方は失念た事を仕ましたね」と云う、目科は宛も今まで
 の経験にて細君の意見の侮り難きを知れる如く、此言葉に多少の
 重みを置き「失念た事とは何が細「現場を立去つてから直に牢屋
 へ行くと云う事は有りませんよ目「だつて牢屋には肝腎の藻西
 太郎が居るだろうじや無いか細「でも貴方、藻西に逢た所で別に
 利益は無ツたでしょう、夫よりは何故直に藻西太郎の宅へ行き其
 妻を尋問しませぬ」目科は成るほど、思いしか一語を発せず猶お
 細君の説を聞く、細君は語を継ぎて「直に行けば猶だ藻西太郎が

捕縛されて間も無い事では有るし、妻の心も落着いて居ぬ間です
 から其所そこを附込みつけこ問落せば何の様な事を口走たかも知れません、
 包み兼かねて白状するか、夫それほどまでに行かずとも貴方の眼まなこで顔色ぐ
 らい読む事が最易いとやすかツただらうと思ひますよ」此口振は云う迄も
 無く藻西を眞の罪人と思ひ詰ての事なれば余は椅子より飛上り
 「おや／＼奥さん、夫それでは藻西太郎を本統の犯罪人と思おぼしめ召すの
 ですか、エ貴女」細君は不意の横よこ槍やりに少し驚きし如くなりしも、
 直に落着て何所どこやら謙遜の様子を帯びつゝ、「はい若もしや爾そうでは有
 るまいかと私しは思ひます」余は是に對し熱心に藻西太郎が無罪
 なる旨を弁せんとするに細君は余に其暇を与えず、直ちに又言葉
 を継ぎて「孰いずれにしても此犯罪が其妻倉子とやら云う女の心から

湧て出たには違ひ有ません私しは必ず爾だと思ひますよ、若し犯罪が二十有るとすれば其そのうち中の左様さ十五までは大抵女の心から出て居ます、夫は私しの所天おつとに聞ても分ります、ねえ貴方」と一ち寸と目科よいに念を推して更に「のみならず店番の言立いいたてでも大概は察せられるじや有ませんか、店番は何と云いました倉子と云う女は大変な美人で、望みも大きく、決して藻西太郎の様な者に満足して居る者で無くて、夫で彼れを鼻の先で使い兼ないと云た様に私しは今聞取りましたが、爾そうですか余「爾です細「して又藻西が家の暮しは何の様なんです随分困難だと云いましょう、ですから妻は自分の欲しい物も買かわな無いし、現在金持の伯父が有ながら此様な貧苦をするのは馬鹿／＼＼しいと思ツたに違ひ有りません、既に昨年

とかも藻西太郎に勧め伯父から大金を借出させようとした程では
 有ませんか、最早もはや我慢が仕切れ無く成た為としか思われません、
 夫それを老人が跳附けて一文も貸さ無なかツたゆえ自分の望みは外れて仕
 舞い老人が憎くなり夫かと云て急に死しに相そな様子も無くあゝも達
 者では死だ所が自分等の最もう齒の抜ける頃だろう間まが悪ければ自
 分等の方が却かえつて老人に葬とぶらいを出して貰しう仕儀しぎに成るかも知れぬと
 斯思こうツた者ですから是が段々と抗こうじて来て終ついに殺して仕舞う心こに
 も成り間まがな隙がな藻西太郎に説ときつ附けて到頭彼れに同意させ果はては
 手ずから短刀を授けたかも知れませんが、藻西太郎も初めの中は何どう
 でしたか手を更かえ品を変えて口説かれるうちにはツイ其氣そになり、
 夫それに又商売は暇になる此儘居ては身代限り可愛い女房くわも食し兼る

事に成るし、貧苦の恐れと女房の嘆きに心まで暗くらんで仕舞い何どうやら斯ことうやら伯父を殺して其身代を取る氣に成たのです藻西の外ほかには誰も其老人を殺して利益を得る者は一人も無いと云うたでは有りませんか、若もし盜坊どろぼうならば知らぬ事、老人を殺した奴が何一品盜まずに立去たと云う所を見れば盜坊どろぼうで有りません愈いよく々藻西に限ります藻西の外に其様な事をする者の有う筈が有ません、妻が必ず彼れに吹込み此罪おかさを犯おけたのです」と女の口には珍めずらしきほど道理を推して述べ来る、其言葉に順序も有り転末も有り、目科も是に感心せしか「成るほど」とて嘆息せり、余も感心せざるにあらねど余は何なにぶん分ぶんにも今まで心に集めたる彼れが無罪の廉かどく々くを忘れ兼れば「では何どうですか、藻西太郎は伯父を殺して仕舞た後わで故

ざく々 自分の名前を書附けて置いて行く程の馬鹿者ですか「唯此一点が藻西の無罪を指示す最も明かなる証拠にして又最も強き箇条なれば是には目科の細君も必ず怯^{ひる}みて閉口するならんと思ひしに、細君は少しも怯^{ひる}まず却^{かえ}つて余の問を怪む如くに「おや自分の名前を書附たから夫^{それ}で馬鹿だと仰有るのですか、私しは馬鹿には迎^{とて}も出来ぬ所だろうと思ひますよ余」とは又何故です細「何故とて貴方、若し其名前を書附けずに行て仕舞ば一も二も無く自分が疑われるに極ツて居ます、疑いを避けるには大胆に自分の名前を書附ける外は有ません、夫を書附て置たればこそ現に彼の仕業で有るまいと思う人が出て来たでは有ませんか、貴方^{そう}にしる爾^{そう}でしよう若^もし何^どうしても自分が疑われるに極ツて居るなら其疑いを避る為

には充分の度胸を出し自分の仕業とは思われぬ様な事を仕て置き
ましよう」此の力ある言開いいひらきには余も殆ど怯ひるまんとす、凶らざり
き斯かる堂々たる大議論が女流の口より出いできた来らんとは

余が怯まんとする色を見て細君は更に又力強しんろんぼうき新論鋒さしむを指
向けて「夫それで無ければ第一又老人の左の手に血の附つて居たのが分

ら無くなつて来ます、若しも貴方の云う通り藻西太郎より外の者
が老人を殺し其疑いを藻西に掛ようと思つて血の文字を書たのな
ら、其者こそ文字は右の手で書くか左の手で書くかも知しらぬ馬鹿も
のと云わねばなりません、夫ほどの馬鹿ものが世に有ましよう
か、老人の左の手へ血を附けて置けば誰も老人が自分で書いたと
は思いません、曲者の目的は外れます、藻西太郎へ疑いを掛けよ

うとして却て彼の疑いを掃い退て遣る様な者です、人を殺して後で其血で文字を書附るほど落着た曲者が真逆に老人の左の手を右の手とは間違えますまい、ですから藻西の外に曲者が有るとすれば其曲者は決して老人の左の手へ血は附けません必ず何う見ても老人が自分で書たに違い無いと思われる様に右の手へ附けて置きます、所が之と事かわり、其曲者を私しの云う通り藻西自身だとすれば全く違つて参ります何うでも左の手へ血を附て置ねば成らぬのです、何故と仰有れば藻西ならば其文字を本統に老人が書たものと認められては大変です、自分の首が無く成ります、何うしても老人が書たで無く曲者の書たに違い無い様に見せて置ねばなりません、爾見せるには何うすれば好いのでしょうか、即ち血

を老人の左の手へ附けて置くに限り、左の手に附て置けば誰
 も老人の仕業とは思わず、去ればとて現に藻西の名を書て有るか
 ら真逆まさかに藻西が自分で自分の名を書く程の馬鹿な事を仕様とは猶な
 おさら
 更思われず、否いやおう応なく疑いが外の人へ掛つて行きます、論よ
 り証拠には貴方さえも無理に疑いを外の人へ持て行こうと成つて
 居るでは有ませんか、先まア能く考よえて御覧なさい」と是だけ言て
 息を継ぐ、余が返事の出ぬを見、細君は少し気の毒と思ひし如く
 もつと
 「尤も女の似え而非理屈せとか云う者でしょう、素もとより現場も見ませ
 んで、真逆当りは仕ませんけれど既に店番が藻西を見たと言ひ其
 上連つれて居た犬は藻西の外の者へは馴染ぬとも云たのでしよう夫それや
 是これや考えて見ると藻西と云う方が何どうしても近いかと思われ、

詰り藻西は何でしよう随分智慧の利く男で、通例の手段では倒底助からぬと思ツたからずツと通越して此様な工夫を定めたのでしよう「細君の言葉の調子が斯く大に柔かくなるに連れ余の疑いも亦再び芽を吹き「爾すると藻西が自分で白状したのは何う云う者でしよう細「夫が即ち彼れの工夫の一部分では有ませんか余「だツて貴女、彼れは老人が何で殺されたか夫さえ知ぬ程ですもの細「知ぬ事は有ますまい、貴方がたが鎌を掛たから夫を幸いに益々知らぬ振をするのです、此方から短銃と言た時に直様はい其短銃は云々と答えたのが益々彼れの手管ですわ、詰り彼れは丁度計略の裏を書いて居るのです、其時若し彼れがいえ短銃では有ません短剣でしたと答えたなら貴方がたも之ほどまで彼れを

無罪とは思わず彼れの工夫が破れて仕舞いましょう、貴方がたの見て驚く所が彼れの利口な所だと私しは思いますが」

余は猶なお何とやら腑に落ぬ所あれば更に議論を進めんとするに、目科は横よこあい合あより細君に声を掛け「これく、和女そなたは今夜何どうかして居るよ、毎いっもと違ちがい余り小説じみた事を云う」と制し更に余が方かたに向むき来きたりて「今夜は最もう置きたまえ、僕は既に眠くなつた。其代り明早朝に又君を誘うから」

実に目科は多年経験を積みし為め事に掛れば熱心に働はたらき通し、其代り又ひとた一ひとび心を休めんと決すれば、其休むる時間丈だけ全く其事を忘れ尽して他の事を打樂しむ癖を生じたる如くなるも余には仲々其真似出来ず「然さらば」とて夫婦に分れを告げ居間に帰りて寝

て後も唯ただ此事件のみ氣に掛り眠らんとして眠り得ず、「あゝ藻西太郎は罪無きに相違なし」と呟き「罪なき者が何故に自ら白状したるや」と怪み、胸に此二個の疑ぎだん団闘い、微まどろ睡みもせず夜を明しぬ

第八回（太郎の妻）

読者よ、初めて此犯罪に疑いを容ゆるれたるは実に余なり、余が老人の死骸を見て其顔に苦痛の体ていなきと其右の手に血の痕なきを知りてより斯かくは疑い初めたる者なれば余は如何にしても藻西太郎の

無罪なるを証拠立てねばならず、のみならず現に無罪と思う者が
裁判官の過ちや其外の事情の為め人殺しの罪に落さるゝを見、知
ぬ顔にて過さる可きや、余は此事件の眞実の転末を知らんが為には
身を捨るも可なり職業を捨るも惜からずとまでに思いたり、思
ひて夜を明し藻西太郎は確に無罪なりと思ひ詰るに至りしかど
又翻えりて目科の細君が言たる所を考え見れば、余が無罪の証拠
と見認むる者は悉く有罪の証拠なり細君の言葉は仮令目科の評
せし如く幾分か「小説じみ」たるに相違無しとするも道理に叶
ぬ所としては少しも無し、成るほど藻西太郎は其妻にほだされて伯
父を殺すの事情充分あり「之加も自ら殺せしと白状したり」愈々
々々彼れが殺せしとすれば成るほど其疑を免るゝ奇策として我名

を記すしるの外なきなり、我名を記すも老人の右の手を以て記す可からず、唯左の手を以て記すの一方なり、余の疑いは実に粉々に打碎かれたるに同じ、余は殆ど返す可き言葉を知らず、あゝ余は竟ついでに此詮索を廃す可きか、余の過ちを自認す可きか。

余が殆ど思い屈したる折しも昨夜の約束を忘れずして目科は余の室に入来れり、彼れは余の如く細君の言葉には感服せざるか思おも屈くつする体更ていに無く、却かえつて顔色も昨夜より晴渡れり、彼れ第一に口を開き「今日も君一緒に行くが其代り今いまから誠まめて置く事が有る僕が何どの様な事を仕ようと決して口を出し給うな、若もし僕に口をきゝ度たいなら誰も外に人の居無い本統の差向なついに成た時を見て言給え」余は素もとより自ら我が智識我が経験の目科に及ばざるを知ら

ば此誠めを不平には思わず唯再び此詮索に取掛るの嬉しさに一も
 二も無く承諾して早速に家を出しが、目科の今日の打扮は毎も
 より遙か立派にして殊に時計其他の持物も殆ど贅沢の限りを尽し
 何う見ても衣服蕩樂、持物蕩樂なる金満家の主人にして若し小間
 物屋の店の者にも見せたらば斯る紳士を得意にし度しと必ず涎
 を流すならん、何故に斯も立派に出立しや、余は不審の思い
 を為し、歩みながらも「君今日は何の様な方針を取る積りか」と
 問しに目科は平氣にて「問わずとも知れて居よう、藻西太郎の妻
 倉子を調るのさ」扱は目科も細君の議論に打負け、昨夜分るゝま
 で藻西を無罪と認めしに今朝は早や藻西が其妻に煽起かされて伯
 父を殺せし者と認め藻西の妻を調べんと思えるなるか、斯く思い

て余は少し失望せしに目科は敏くも余の心を察せし如く「僕が吾が妻の意見を聞くのを君は可笑いと思うだろうが、有名なる探偵の中には下女の意見まで問うた人が有る、今までの経験に由り僕は何の様な事件でも一度は女房の意見を聞いて見る、女房は女の事で随分詰らぬ事も言い殊に其意見が何うかすると昨夜の様に小説じみて来るけれど、僕は又単に事実の方へのみ傾き過る事が有つて僕の考えと妻の考えを折衷すると丁度好い者が出来て来る」と云う是にて見れば満更細君の意見にのみ心酔したる様にも有らねば余は稍や安心し、今日中に如何ほどの事を見出すならんと夫のみを楽みて再び又口を開かず、歩みくゞて遂に彼の藻西太郎が模造品の店を開けるビビエン街に到着せり、此町の多く紳

士貴婦人の粧飾品を鬻げる事は兼てより知る所なれど、心に
 思いを包みて見渡すときは又一入立派にして孰れの窓に飾れる
 品も、実に善尽し美尽し、買度き心の起らぬものとは一個も無
 し、藻西太郎の妻倉子は此上も無き衣服蕩楽とか聞きたり斯る町
 に貧く暮しては嘸かき欲き者のみ多かる可く爾すれば夫等の慾に
 誘われ、終に貧苦に堪え得ずして所天に悪事を勧むるにも至りし
 歟あ、目科の細君が言し所は余の思いしより能く当り藻西の無罪
 を証拠立んとする余の目的は全く外れんとするなる歟、余は此町
 の麗わしさに殆ど不平の念を起し藻西が何故身の程をも顧みず此
 町を撰びたるやとまで恨み初めぬ、目科も立留りて暫し彼方此方
 を眺め居たるが頓て目指せる家を見出せし如く突々と歩去る

にぞ藻西の家に入る事かと思いの外、彼は縁も由縁も無き蝙蝠
 傘屋に入らんとす「君夫は門違いで無いか」と殆ど余の唇頭ま
 で出たれど茲が目科の誠めたる主意ならんと思ひ返して無言の儘
 に従い入るに、目科は此店の女主人に向い有らゆる形の傘を出
 させ夫も了ぬ是も氣に叶わずとて半時間ほども素見したる末、終
 に明朝見本を届くる故其見本通り新に作り貰う事にせんと云いて、
 此店を起出たり、余は茲に至り初て目科が毎もより着飾たる
 訳を知れり、彼は斯く藻西が家の近辺にて買物を素見しながら店
 の者に藻西の平生の行いを聞集めんと思えるなり、身姿の立派
 だけ厚く遇なさるゝ訳なれば扱も賢き男なるかな、既に蝙蝠傘屋
 の女主人なども目科が姿立派なると注文の最六かしきを見て是こ

そは大事の客と思ひ益々世辞沢山に持掛けながら知しららず識しららず目科の巧みなる言葉に載せられ藻西夫婦の平生の行いに付き己れの知れる事柄だけは惜気も無く話したり、斯かくて目科は幾軒と無く又別の店に入り同じ手段にて問掛るに、藻西太郎の捕縛一条は昨夜より此近辺の大問題と為なれる事なれば問ざるも先より語り出る程にして中に口重き者あらば實際に少しばかりの買物を為そしを餌に話の端いとぐち緒を釣出すなど掛引万々抜目なし、六七軒八九軒凡およそ十軒ほど素見ひやかし廻りたる末、藻西夫婦が事に付き此辺の人が知れるだけの事は残り無く聞集めたるが其大要を摘つまめば藻西太郎は此上も無なき正しやうじきじん直人なり何事ありとも人を殺す如きことは決して無く必ず警察の見込違ちがひにて捕縛せられし者ならん遠からず放免せら

るゝは請合なり、彼れ其妻に向いては殆ど柔か過るほど柔かにし
 て全く鼻の先にて使われ居し者なり、斯も妻孝行の男は此近辺に
 二人と見出し難し、等の事柄にして殆ど異口同音なり、唯だ彼れ
 の妻お倉に就きては人々の言葉に多少の違ひ有れど引括れば先
 ず、お倉は美人なり、身体に似合ぬほど其衣類立派なり、去れど
 悪き癖とては少しも無し、身持は極めて真面目なり、亭主に向い
 ては威権甚だ強過れど爾ればとて恭わざるに非ず、人附も甚だ
 好ければ猥しき振舞は絶て無く、近辺の戯れ男の中には随分お倉
 に思いを掛け彼れ是れ言寄らんとする者あれどお倉は爾る人と噂
 を立られたる事も無ければ少したりとも所天に嫉妬を起させる如
 き身持を為したる事なし、妻として充分安心の出来る女なり、な

ど云うだけなり。

是だけ集め得て目科は最も満足いとの体ていにて「何うだ君、斯こうして集めたのが本統の事実だぜ若もし探偵と分る様な風をして来て見たまえ、少し藻西を悪にくむ者は実際より倍も二倍も悪く言い又悪にくみも好みもせぬ者は成なる可べく何事も云うまいとするから本統の事は到底聞き出す事が出来ぬ、さあ之これから愈いよく々藻西の家に行き細君に直じ々逢きうのだ」と云う、藻西の店は余等よらが立てる所より僅か離れしのみにして店先の硝子がらすに書きたる「模造品店、藻西太郎」の金文字も古びて稍やや黒くなれり目科は余を従まえ先まず其店の横手に在る露路の所に立ち暫し店の様子を伺う体なる故、余は氣短かく「直すぐに中へ這ろうじや無いか」と云う目「いや兎とに角細君が店へ

出て来る様子を見度たい、夫それまで先まずず辛抱しんぱうしたまえ」とて是これより凡およ
 そ二十分間ほど立たれど細君こまぎみは出いで来たきた様子なし目め「是これだけ待まち
 出て来こねば此上待こゝつにも及およぶまい、来こたまえ、さア行ゆう」と云い
 直ただちに店の前まへに進すすめば十六七なる下女げにょ一人、帳場ちやうばうの背うしろ後ごより立た来こ
 り「何を御覽ごらんに入いましよう目め「いや買物かひものでは無ない、外ぐわいの用事ようじだ、
 内儀ないぎは内うちか下女げにょ「はいお内うちです、是これへお呼よ申ましましように」とて、
 早はやや奥おくに入いんとするを目科めしなは逸いちはや早はやく引留ひきどめて自みづから其店そのみせに上のぼり、
 無遠慮むゑんりょに奥おくの間まに進すすみ入いる、余あまも何をなにか躊躇ためらう可べき目科めしなの後のちに一ひと
 歩ひとも遅おそれず引続ひきつきて歩あみ入いれば奥おくの室むまと云いえるは是これれ客室きやくまと居ゐ
 室むまと寢室ねむらとを兼かねたる者ものにして彼方あつちの隅ぐもには脂あかじみ染あたる布ぬいを以もつて覆おほ
 える寢台ねだいあり、室中むまぢゆう何なにと無なく薄暗うすくらし、中程ちゆうぢやうには是これも古ふるびたる切きを

掛し太き卓子あり、之を囲める椅子の一個は脚折れて白木の板を

打附けあるなど是だけにても内所向の豊ならぬは思い遣らる。

去れど是等の道具立てに不似合なる逸物は其汚れたる卓子に

憑り白き手に裁判所の呼出状を持ちしまゝ憂いに沈める一美人な

り是ぞこれ噂に聞ける藻西太郎の妻倉子なり、倉子の容貌は真に

聞きしより立優りて麗しく、其目其鼻其姿、一点の申分無く、

容貌室中に輝くかと疑われ、余は斯る美人が如何でか恐しき罪を

計みて我が所天に勧めんやと思いたり、殊に其身に纏えるは愁い

を表する黒衣にして能く今日の場合に適し又最も倉子の姿に適し

たり、倉子の美しくしきは生れ附の容貌に在りとは云え衣類の為に

一入引立たる者にして色も其黒きに反映して益々白し余は全く

感心し暫し見惚るゝのみなりしが、感心の薄らぐと共に却て又一種しほの疑みといを生じたり、此女うれ愁いに沈めるには相違なきも眞実愁いに沈みし人が衣類に斯くも注意する暇あるや、倉子が撰びに選びて最も似合しきものを着けしは殊更に其憂いを深く見せ掛る心には非ざるか、目科も内心に幾分か余と同じ疑いを起したること眼まなこの光にて察せらる、倉子は余等が突然に入來るを見、驚きて飛立ちつ、涙に潤む声音にて「貴方がたは何の御用事です」と問う、目科は最いと嚴格に「はい警察署から送られました、私わたくしは其筋の探偵です」と答う探偵との返事を聞き倉子は絶望せし人のごとく元の椅子に沈み込み殆ど泣なみだ声こゑを洩さんとせしも、思おも直いなしてか又起たちあ上り、今度は充分に怒を帯びたる声鋭く「あゝ私しを

捕縛するため来たのですね、さあお縛なさいお連なさい、連て行
て所天おつととともに牢の中へ投込んで戴きましよう、罪無き所天を殺
すなら私しも一緒に殺して下さい、さあ、さあ」と詰寄する、是
が真実此女の誠まごころ心ならば誰か又此女を所天に勧めて其伯父を殺
させし者と思わん、唯之だけにて無罪の証拠は充分なり、流石さすがの
目科も持もてあま余して見えたるが此時彼方なる寝台の下にて狗いぬの怖こわら
しく嘈うなるを聞く、是なん兼かねて聞きたる藻西太郎の飼かいいぬ犬プラトと
やら云えるにして今しも女主人が身を危あやうしと見、余等二人に嚙附
んとするなる可べし、倉子は一声に「これ、プラト、怒るのじゃ無
いよ、此お二人は恐しい方じゃ無いから」と、叱り附る、叱る心
を曉さとりか犬は再び寝台の下に隠れたれども、猶なお少しでも女主人

の危きを見れば余等二人に飛附ん心と見え暗がりにて見張れる眼まなこ、
 宛も二個あたかふたつの星の如くに光れり、目科は倉子の言葉を機会しおに「ほん
 に吾々は恐しい人じや有ありません、斯こうして来たのも捕縛など云う恐
 る可べき目的では無いのです」是だけ聞きて倉子は少し安心の色を
 現すかと思ひしに少しも爾さること無く、目科の言葉を聞ざりし如
 くに、我手に持もてる呼出状を一寸ちよつと眺めて「今朝裁判所から此通り
 私しを午後の三時に出頭しろと云て来ましたが、裁判官は虫も殺
 さぬ私しの所天へ人殺の罪を被きせ、夫それで未まだ飽あきたら足たらず、私しをま
 で何どうか仕ようと云うのでしよう」目科は今までに余が見し事な
 きほど嚴いたゞそかなる調子にて「裁判所は決して貴女の敵では有ませ
 ん唯問といたゞ糺だけす丈の事です、貴女に問えば若しも藻西太郎の罪の無

い証拠が上ろうかと思う為です、私しの来たのも矢張唯だ夫だけ
の目的で、色々貴女に問うのです、貴女の答え一つに依り嫌疑が
益々重くもなり、又全く無罪にも成りますから腹臍ふくぞうなく返事す
るのが肝腎です、さ何うか腹臍なく」と云れて倉子は凡そ一分間
が程も其青き眼まなこを挙げ目科の顔を見詰るのみなりしが、漸くにし
て「さアお問なさい」と云う、あゝ目科は如何なる問を設けて倉
子を罫わなに落さんとするや、定めし昨夜藻西太郎を問し如く敵の備
え無き所を見て巧みに不意の点のみを襲うならんと、余は窃ひそかに
堅唾かたずを呑みしに彼れは全く打て変り、正面より問進む目「えー、
藻西太郎の伯父梅五郎老人の殺されたのは一昨夜の九時から十
二時までの間ですが其間丁度藻西太郎は何所どこに居ました何をして」

倉子は煩悶に堪えぬ如く両の手を握り、《し》め「是が本統に、
 運の尽つきと、云う者です」と言掛けて涙に咽むせぶ目「運の尽とは何どう
 云う者です、所天おっとが何所おとに何をして居たか、貴女が知らぬ筈はずは有
 りますまい倉「はい」と漸く言いわんとして泣声に胸塞むねさがり暫し言葉
 も続かざりしが漸くに心を鎮め「はい所天は一昨夜外へ出まして
 目「外へ出て何所へ行きました倉「モントローグまで参りました、
 兼かねて同所に此店の職人が住で居まして、先日得意先から注文され
 た飾物を其職人に誂あつらえて置きました所ところろ、一昨日が其出来揚あがりの
 期限ですのに、夜よに入るまで届けて来ませんから、若もし此上遅れ
 ては注文先から断られるかも知れぬと云それい夫おっとを所天おっとは心配しまし
 て九時頃から其職人の所へ催促に出掛ました尤も私もしもりセリウ

街の角まで送て行つたから確かです其所から所天がモントロウグ
行きの馬車に乗る所まで私しは見て歸りました」余は傍より此返
事を聞き、是ぞ正しく藻西が無罪の証拠なると安心の息を発と吐
きたり、目科も少し調子を柔げ「爾すると其職人に問えば分りま
すね、十一時頃までは多分其職人と一緒に居たでしょうから」実
に然り、彼の老人が殺されし家の店番の証言にては藻西太郎が九
時頃に老人の室に來り十二時頃まで老人と話して歸りたりとの事
なれば、若し藻西が十一時前後頃に其職人と一緒に居たりとの事
分らば、老人の許を問ひしは藻西太郎に非ずして藻西に似たる別
人なること明かなれば、老人を殺せしも矢張其別人にして藻西の
無罪は明白に分り來らん、目科が念を推す言葉に倉子は却て落胆

し「さア夫それが分らぬから運の尽だと申すのです目「え、え、夫が分らぬとは、又何どう云う訳で倉「生憎其職人が内に居なくて所おつと天は逢あわずに歸かつて参りました」目科も失望せしと見え急しく煙草を喫くぐ真似して其色を隠し「成るほど夫は不運ですね、でも其家の店番か誰かゞ貴方の所天を認めたでしょう倉「夫が店番の有る様な家では無いのです。自分の留守には戸をめ《しめ》て置くほどの暮しですから」ああ読者よ、如何にも是は運の尽なり、實際には随分あり勝の事柄なれど、裁判の証拠には成なりがた難がたし、証拠と為らざるのみならず若もし裁判官に此事を聞せては却かえつて益々疑わしと云い藻西太郎に罪のある証拠に数えん、之を思えば藻西太郎が、直すぐに自ら白状したるも之が為に非あざるか、有ありの儘まを言立たりとて

不運に不運の重なりし事なれば信ぜらるゝ筈は無く却ツて人を殺せし上裁判官をまで欺く者と認められて二重の恥を晒す理なれば、我身に罪は無しとは云え、孰れとも免れぬ場合、潔よく伏罪し苦しみを短かくするに如くなしと無念を吞て断念めし者ならぬか、余が斯く考え廻すうちに目科は又問を発して「だが藻西は何時頃に歸て来ました倉」「十二時過る頃でした目」「何故其様に遅かつたでしょう倉」「はい私も少し遅過ると思いましたが問いましたか或珈琲店へ寄り麦酒を飲で居たと云いました目」「歸ツた時は何の様な様子でした倉」「少し不機嫌では有ましたが、夫は尤も次第です目」「着物は何の様なのを被て居ました倉」「昨日捕えられた時と同一の着物でした目」「夫にしても彼の様子か顔附に何か

変ツた所は有りませんでしたか倉「少しも有りませんでした」

第九回（詰らぬ事）

余は初めより目科の背後うしろに立てる故、氣を落着けて充分に倉子の顔色を眺むるを得え、少しの様子をも見落さじと勉つとめたるに、倉子が幾度も泣出さんとし殆ど其涙を制し兼る如き悲みの奥底どこに何処どこと無く微かすかに喜びの氣を包むに似たる心地せらるゝにぞ、若しもや目科夫人の言いし如く此女に罪あるに非ざるやと疑う念を起しはじめ、幾度か自ら抑えて又幾度か自ら疑い、終ついに目科の誠いましめを

打忘れて横合より口を出せり余「ですが内儀、老人の殺された夜、太郎どのが其職人の家へ行かれた留守に貴女は何所に居たのです」倉子は宛も余が斯く問うを怪む如く其眼を余が顔に上げ来り最柔かに「私は此家に留守をして居ました、夫には証人も有る事です余「え、証人が倉「はい有ります、御存の通り一昨夜は毎もより蒸暑くて夫にリセリウ街で所天に分れ内まで徒歩で帰りました為め大層咽が乾きまして、私は氷を喫ようと思いましたが一人では余り淋しい者ですから右隣の靴店の内儀と左隣の手袋店の内儀を招きました所ろ、二人とも早速に参りまして十一時過までも茲に居ました、夫は直々其両女にお問成されれば分ります、斯う云う事に成て見ますと何気なく二人を招たのが天の助

けでゞも有たのかと思ひます」あゝ是れ果して何気なく招きたる者なるや、真に何気なかりしとすれば倉子の為に此上も無き好き証拠なれど心なき身が僅か氷ぐらいの為に両隣の内儀を招くべしとも思われず、其実深き仔細ありて真逆まさかの時の証人にと心に計たくみて呼びし者に非ざるか、斯く疑いて余は目科の顔を見るに目科も同じ想いと見えちらりと余と顔を見交せたり、去れど今は目めくば配せして倉子が心に疑を起さしむ可べき時に非ず、目科は又真面目になり「いや内儀決して貴女を疑うのでは有ませんが唯たゞ吾々の心配するには若しや藻西太郎が犯罪の前に何か貴方に話した事は有る舞まいかと思うのです、何か罪でも犯し相そな事柄を倉「何どうして其様な事が有りましたよう、爾そうお問なさるのは吾々夫婦を御存無

いのです目「いやお待なさい、噂に聞けば此頃商売も思う様に行かず、随分困難して居たと云いますから若や夫等の話から自然彼の老人の事にでも移り——倉「はい如何にも商売の暇なのは真事ですが、幾等商売が暇だからとて目「いえ藻西太郎も自分一身の事では無し最愛の妻も有て見れば妻に不自由をさせるのが可哀相で、夫や是から何うかして一日も早く楽に成り度い財産を手に入れ度いと云う事情は有たに違ひ有ますまい倉「其様な事情が有たにせよ何で伯父などを殺しましたよう、所天に罪の無い事は何所までも私しが受合ます」目科は徐ろに煙草を噛ぐ真似して「藻西太郎に罪が無いとすれば彼れが白状したのは何う云う訳でしょう、真実罪を犯さぬ者が爾う易々と白状する筈は有りますまい」今

まで如何なる問に合ても濼よどみ無く充分の返事を与えたる倉子なる
 に此問には少し困りし如く忽たちまち顔に紅を添そえ殊ことに其眼まなこまで迷い出
 せり、之れ罪の有る証跡と見る可きや否いな、暫しばらくして亦またも涙の声と
 為り「余り恐ろしい疑いを受けた為め気が転倒したのかと私しは
 思いますが目「いや其様な筈は有りません縦たどい一時は気が転倒し
 たにもせよ夫は少し経てば治おさまります、藻西太郎は一夜眠た今朝に
 成なても矢張り自分が犯したと言張はつて居ますから」此言葉にて察
 すれば目科は今こんちよう朝余の室を叩く前に既に再び牢屋に行き藻西
 太郎に逢来りしものと見ゆ、何しろ此言葉には充分の力ありて倉
 子の心を打碎ぶきし者とも云う可く、他かれ面色を灰の如くにし「何ど
 うしたら好よう御坐ございましょう所おつと天は本統に気が違ちがつて仕舞いまし

た」と絶叫せり、あゝ藻西太郎の白状は果して気の狂いたる為なるか余は爾そつうと思ひ得ず、思ひ得ぬのみにあらで余は益々倉子の口と其心おなじと同からぬを疑い、他かれが悲みも他かれが涙も他かれが失望の絶叫も総すべて最巧いたくみなる狂言には非ざるや、藻西太郎の異様なる振舞も幾何いくらか倉子の為めに由よれるには非ざるや、倉子自ら真実の罪人を知れるには非ざるやと余は益々疑いて益々まじ惑えり。

目科は如何に思えるや知ざれど彼れ鼻煙草のお蔭にて何の色をも現さず、徐々しずくと倉子を慰めし末「いえ此事件は余り何も彼も分ら無さ過るから詰つまり方々へ疑いが掛るのです、事が分れば分るだけ疑われる人も減る訳ですから此上申もうしかね兼かねたお願ながら何どうか私しに此家の家捜をさせて下されますまいか」と大胆な事を言出

せり、余は目科が何の目的にて屋捜せんと欲するにや更に合点行かざれど無言の儘ま控ゆるに倉子は快よく承諾し「はい爾そして疑いを晴せて戴く方が私しも何れほど有難いか知れません」と云いが否いなや其衣囊かを搔か探いりて戸毎とごの鍵を差出す様さま、心に暗き所ある人の振舞とは思われず、目科は其鍵を受取りて戸棚押入は申すに及ばず店より台所の隅までも事細かに調べしかど怪む可べき所更に無く「此上捜すのは唯穴倉一つです」と云い又も倉子の顔を見るに倉子は安心の色をこそ示せ、氣遣う様子更に無し、去されど目科は落胆せず、倉子しよに燭よくを乗とらせて前に立たせ余を背うしろに従えて、穴倉の底まで下り行くに、底の片隅に麦酒びいの瓶あり少し離れて是よりも上等と思わるゝ酒類の瓶を置き、猶なお四辺あたりには様々の空瓶うずたかを堆かき

ほど重ねあり、目科は外の品よりも是等の瓶に尤も其眼を注ぎ殊に其瓶の口を仔細に検むる様子なれば余は初て合点行けり、彼れは此家の瓶の中に若し彼の曲者が老人の室に投捨て去りし如き青き封蠟の附きたるコロツプあるや否を探究めんと思えるなり、凡そ二十分間ほども探りて全く似寄りたるコロツプの無きことを確め得たれば、彼れ余に向い「何も無い、探すだけは探したから最上出よう」と云う、今度は余が最先に立ち梯子を上り、頓て元の室に達すれば、件のプラトが又寝台の下より出来り齒を露出して余を目掛け飛掛らんとす、余は其劍幕に驚きて一足背後に退下らんとする程なりしが、斯と見て倉子は遽しく「プラトやこれ」と制するに犬は忽ち鎮りて寝台の所に退けり、余は漸く安

心して進みながら「随分けんのん險呑な犬ですね」と云う「なに爾そうでは
あり有ません心は極ごく優しいですが番ばんいぬ犬の事ですから私共夫婦の外は
 誰を見ても油断せぬ様に仕附しつけて有ります、商売が商売で雇人にも
 気の許されぬ様な店ですから「余は成る程と思いつゝも声を柔げ
 て「来い〜プラト」と手招するに彼れ応ずる景色けしきなし「駄目
 すよ、今申す通りわたくしか所天おっとの外は誰の言う事も聞きませ
 んから」

読者よ是等の言葉は当前の事にして少しも怪むにも足らず又心
 に留むるにも足らざれども、余は此言葉に依り宛あたかも稲妻の光るが
 如く我が脳髓に新しき思案の差込み来るを覚えたり、一分の猶予
 も無く熱心に倉子に向い「では内儀ないぎ犯罪の夜に此犬は何所どこに居ま

したか」と打問えり。

不意に推掛おしかけたる此間に倉子の驚きたる様は実に譬たとうるに物も

無し、余は疑いも無く他かれの備えの最も弱よき所を衝つきたり、灸きゆう

所しよとは斯かるをや云うならん、倉子は今も猶お手に持てる燭台を

取落さぬばかりにて「はい此犬は、此犬は、爾そうです何所に居まし

たか、存じませんいや思い出しませんが」と綴る言葉も覺おぼ束つかな

し余「夫それとも太郎殿に随つて行きでもしましたか」此添そえ言葉に力を

得倉「あゝ思い出しました、爾そう々全く所天そんに随つて行たのです余

「では馬車に乗ても矢張其後に随つて行く様に仕込し込こで有ありますか、何

でも太郎殿はリセリウ街まちから馬車に乗たと仰おつ有しった様でしたが」

倉子は一言の返事無し、余は益々切込き込こみて充分に問詰と詰とんとするに、

たる言葉なりしが、余は彼を佶きつと見詰て「夫は僕の方で云う言ことだ、君こそ心を失つたのだらう、僕が発見した敵の灸所は今まで詮策せんさくした中うちで第一等の手掛じや無いか、返事に窮して倉子のドギマギした様が君の目に見えなんだか、今一思いと云う所で何故無理に僕を制した、君はあの女に加担する気か、え君、夫とも犬が非常の手掛りだと云う事が猶まだ君には分らぬか」鋭き言葉に目科は別に怒りもせず「夫だから前いま以て誠まめて置たのだ、成るほど犬に目を附けたは実に感心だ、多年此道で苦勞した僕も及ばぬ程の手柄だ、吾々の抛よる所は是から唯たゞあの犬ばかり、夫にしても君の様に短兵急に問詰ては敵が直すくさま様疑うから事が破れる、今夜にも倉子があがの犬を殺して仕舞うか夫とも何所かへ隠して仕舞えば何うす

るか」成る程と感心して余は猶お我腕前の遙はるかに目科より下なるを
 会得したり。

第十回（判然）

兎とに角かくも犬と云う一個ひとつの捕え所を見出したれば之もとを本にして此
 後の相談を固めんものと余等二人は近辺の料理屋に入たるが二人
 とも朝からの奔走に随分腹すも隙すきし事なれば肉刺ないふ、小刀わねとらを我劣わねとらじ
 と働かせながらも様々の意見を持出し彼是かれこれと鬪たたかわずに、余も目科
 も藻西太郎を真実の罪人に非ずと云うだけ初より一致して今も猶

お同じ事なり、罪人に非^{あらざ}る者が何故に白状したるや是れ二人とも合点の行かぬ所なれど個^こは目下の所にて後廻しとする外無ければ先ず倉子の事より考うるに、倉子も彼の夜両隣^あの細君と共に我家に留りし事なれば實際此罪に手を下せし者にあらぬは必^{ひつじよう}定なり、去ればとて犬の返事に詰りたる所と云い猶お其外の細かき様子など考^{かんがえあわ}合せば余も目科も大^{おお}に疑いあり、手は自ら下さぬにせよ、目科の細君が言し如く此犯罪の発起人なるやも知れず、縦^よし発起人と迄に至らずとも真^{まこと}の罪人を知れるやも知れず、否^{いな}多分は知れるならん。

爾^さすれば罪人は誰なるや此罪人がプラトを連居^{つれい}たる事は店番の証^{しやう}茲にて明白なれば何しろプラトが我主人の如く就^{つきしたが}従^{したが}う人な

るには相違なし。プラトは余等に向いても幾度か齒を露出せし程なる故、容易の人には従う可しとも思われず、然らば家内同様に此家に入込てプラトを手懐得る人の中と認るの外なく、凡そ斯人なれば益々以て倉子が知れる筈なるに露ほども其様子を見せぬのみかは勉て其の人を押隠さんとする所を見れば倉子のためには我が所天より猶お大切の人としか思われず、あゝ我が所天よりも猶お大切のひとつあるや、有らば是れ何者なるぞ。

茲まで考え來るときは倉子に密夫あるぞとは何人にも知るゝならん、密夫にあらで誰が又倉子が身に我所天よりも大切ならんや、唯だ近辺の噂にては倉子の操正しきは何人も疑わぬ如くなれど此辺の人情は上等社会の人情と同じからず上等の社会にては一

般に道德最いと堅固にして少しの廉かどあるも直たゞちに噂の種と為なり厳しく世間より咎めらるれど此辺にては人の妻たる者が若き男に情談口を開く位は当前の事にして見る人も之を怪あやしと思わねば操が操に通らぬなり、殊に又美人の操ほど当あてに成らぬ者は無く嚴重なる貴族社会に於てすらも幾百人の目を偷ぬすみて不義の快樂に耽ふけりながら生涯人に知れしらずして操堅固と褒ほめらるゝ貴婦人も少なからず、物を隠すには男子も遙に及ばぬほど巧なるが凡て女の常なれば倉子も人知れず如何なる情夫を蓄たくわうるや図られず、若し情夫ありとせば其情夫誰なるや、如何にして見破るべきや。

是れ実に難中の至難なり、余は及ぶだけ工夫せし末「何うだ目科君、倉子へ見え隠れに探偵一人を附けて置ては、え君、必ず此

犯罪の前に情夫と打合せて有るのだから当分其情夫が此辺へ尋ねて来る事は有るまいけれど、女と云う者は心も細く所天が牢に入られ、其筋からも時しばく々異様な人が来て尋問するなどの事が有てひとりは独で辛抱が出来なく成り必ず忍で其情夫に逢に行くだろうと思うが「目科は余が言葉に返事もせずひたすら只管に考うるのみなりしがこっせん忽然として顔を上げ「いや了ぬ、了ぬ、俚諺ことわざにも鉄の冷ぬうちほとぼりに打てと云う事が有る、余温うまを冷ましては何も彼も後の祭だ余「では余温の冷めぬうちに甘く見破る工夫が有るのか目「随分あたつ険呑な工夫だけれど一か八か当て碎けるのさ余「夫にしても何う云う工夫だ目「工夫は唯だあの犬ばかりだ、犬を利用する外無うまいから旨く行けば詰る所君の手際だ、犬に目を附け初めたのは君だ

から、夫にしても遣やつて見るまで黙だまつて居たまえ、今に直ぐ分る事だ
余「今に直なら夫まで無言で問まずにも居ようが真に今直遣まるのか
え目「左様さよう、裁判所から倉子に出頭を命じたのが午後三時だから
倉子は二時半に家を出るだろう、家を出れば其留守はあの下女が
一人だから吾々の試験す可きは其間だ余」と云て今既に二時を打
たぜ目「爾だ、さア直に行う」と云い早や勘定を済せて立上れり、
目科が当ツて砕けろとは如何なる工夫なるや知ざれど、余は又も
無言の儘従とい行く、行きて藻西の家より遠からざる所に達し、再
び但とある露路に潜みて店の様子を伺い居るに、幾分間か経ちし頃、
倉子は店口より立出たり、先ほどの黒き衣服に猶お黒き覆面を施
せしは死せし所おつと天の喪に服せる未亡夫人かと疑わる、目科は口の

中にて「仲々食えぬ女だわえ、悲げな風をして判事にあわれ憫みを起させようと思ツて居る」と呟きたり、暫くするうち倉子は足早に裁判所の方かたへと歩み行き其姿も見えずなりしが是より猶も五分間ほど過せし後、目科は「さア時が来た」と云い余を引きて此隠場を出で一直線に藻西の店先に到るに果せるかな先刻見たる下女唯一人帳場に据りて留守番せり、目科の姿を見て立来るを、目科は無雑作なる言葉にて「これく、内儀を一寸と呼で呉れ下」「内儀おかみさんは最もう出て仕舞いましたよ」目科は驚きたる風を示し「其様な筈は無いよお前おかみさん先程来た己の顔を忘れたな下」「いえ爾では有ませんが、全く内儀は出て仕舞たのです、虚うそと思えば奥の間へ行て御覽なさい、最もう誰も居ませんから目」「やれく、あゝ夫は困ツた

なア実に困^{こまつ}た、己よりも先^まア内儀^{うちぎ}が嘸^{さぞ}かし失望する事だろう、困
たなア」と頭を搔く其様如何にも誠^{まこと}しやかなり、下女は何事かと
怪しむ如く、開きたる眼に目科の顔を打眺む、目科は猶も失望せ
し体にて「実は己が余り粗^{そ、つか}匆^{そ、つか}しく聞て行たから悪かつたよ、折
角内儀の言^{ことづけ}伝^{うけ}を受て、先の番地を忘れるとは、爾^{そうく}々お前若し
あの人の番地を覚えて居やア仕無いか、何でもお前も傍で聞て居
たかと思たが女「いえ私^{どなた}しは初めから店へ出て居たから聞^きません
でしたが、でも何方^{どなた}の番地ですか目「何方ツてそれ彼^あの人よ」と
言掛^{たちま}て目科は忽ち詰^{ちま}り「え、己の様な疎^{そ、つ}匆^{そ、つ}かしい男が有うか、肝
腎の名前まで忘れて仕舞ツた、え、何とかさんと言たツけよあの、
それ何とかさんよあの、え、自裂^{じれつ}たい口の先に転^{ころく}々して居て出

て来ない、えゝ何とかさん、何とかさん、おうそれ〱彼のプラトが大変に能く懐なんで居る人よプラトが己かみつきに嚙附かみつきうとした時内儀が爾そう云た、他人で此犬の従うのは唯何とかさんばかりですツて」下女は合点の行きし如く「あゝ分りました夫なら生田いくたさんでしょう、生田さんなら久しく此家の旦那と共に職人を仕て居ましたからプラトを自由に扱います」目科は真実に喜びの色を浮うかめ「あゝ生田さん生田さん、其生田さんを忘れてさ、今度は能く覚えて行いう、其生田さんの居る所は何所どことか云たツけなア」下女は唯此返事一つが己れの女主人には命より大切なる秘密と知らず易やす々と口くちに出いだし「生田さんならロイドレ街二十三番館ばんかんに居るので目

「爾々、爾云たよロイドレ街二十三番館だと、夫すつを全すかり忘れて

居た、難ありがた有いい、お前のお影で助かつた内儀が帰ッて来れば必ずお前を褒ほめるだろう」と反対の言葉を残して戸表おもてへと走り出た。

あゝ、ロイドレ街二十三番館に住む生田と云える男こそ吾々のとうかたき当の敵なり、此上は一刻も早く其館に推おしゆき行て生田を捕縛する外なしと余は思えど目科は「是から裁判所へ行て逮捕状を得て来ねば何事もする訳に行かぬ」と云う余「ダツて君、裁判所へ行けば倉子が既に行て居るから吾々が逮捕状を得るのを見て、生田を逃す様な工夫めくを廻めぐらせるかも知れぬぜ、夫に又ぐずぐずする間に倉子が内へ帰り下女の言葉を聞くとしても吾々の目的は破れて仕舞う目「何が何でも逮捕状が無い事には此上一步も運動が出来ぬか

ら」と云い、早くも通り合す馬車を呼留め、之に乗りて僅か十分と経ぬうちに裁判所に達すれば先ず其小使を呼びて問うに判事は今正に倉子を尋問しつゝありとの事なり、目科は更に手帳の紙を破り之に数行の文字を認め是非とも別室にて面会したしとの意を云い入るゝに、暫くして判事は別室に入来り目科が撥摘みて云う報告を聞き「成る程夫は面白いが最う藻西太郎が白状して仕舞たよ、全^{すつ}かり白状したから外に何の様な疑いが有ても自然に消滅する訳だ」と云い取上る景色も無きを猶も目科が喋々^{くしゃく}と説立^{ときたて}て漸くの事に「然^{しか}らば」との変事^{へんじ}を得、生田なる者に対する逮捕状を認め^{した}て差出すや目科は受取るより早く、余と共に狂気の如く裁判所を走り出、^{また}待せある馬車に乗り、ロイドレ街を指して馬の

足の続く限り走せたり、頓てロイドレ街に達れば町の入口に馬車を待せ、幾度か彼の鼻煙草にて強て顔色を落着けつゝ、二十三番と記したる館を尋ねて、先ず其店番に向い「生田さんは居るか」と問う店「はいお内です、四階へ上れば直に分ります」と答う、目科は階段に片足掛けしが忽ち何事をか思い出せし如く又も店番の許に引返し「今日は生田に一杯振舞う積りで来たが生田は毎も何の様な酒を呑む店「何の様な酒ですか、常に此筋向うの酒屋へは能く行きますが目「好し、彼所で問うたら分るだろう」と云い大足に向うの酒店に馳せて入る、余は薄々と其目的を察したれば同じく酒店に馳て入るに目科は給仕に向い「あの青い口を仕て有る銘酒を持て来い」と云う、給仕が心得て持来るを目科は

受取るが否直ちに其口なるコロツプを抜き其封蠟の青き所を余に
 示してにツこと笑み、瓶は酒の入たる儘にて幾法の銀貨と共に
 卓子の上に残し置き、コロツプを衣囊に入れて再び二十三番
 館に帰り、今度は案内を請わずして四階の上に飛上る、成るほど
 生田の室は「飾職生田」と記したる表札にて明かなれば、直
 ちに入口の戸を叩くに内より「さアお這入り成さい」との声聞ゆ、
 鍵は錠の穴に差込みしまゝなれば二人は遠慮なく戸を開きて内に
 入る、内には窓の下なる卓子に打向い、今現に金の指環に真珠
 を嵌むる細工に掛れる、年三十二三の優さ男、成るほど女にも好
 かれ相なる顔恰好は是れが則ち曲者生田なるべし、生田は二人の
 入来るを見て別に驚く様子も無く立来りて丁寧に「何の御用でお

出に成りました」と問う、目科は斯かる事に慣れし丈だけ、突然進みて生田の腕を捕え大だい喝かつ一声に「法律の名に於て其方そのほうを捕縛する」と叱り附る、生田は初て驚きたるも猶お度胸を失わず「御ご笑談うだんを為なさるな私しが何をしました」目科は肩そびを聳やかして「これ／＼今と成て仮忘とほけても了いけないよ、其方が一昨夜梅五郎老人を殺し其家を出て行く所を確かに認めた者も有り、殊に其方が短剣の刃の欠けぬ様、其剣先に差して行て帰る時に忘れて来たコロツプも持て居る、其証拠を見せて遣やろうか」鋭き言葉に敵し得ず全く逃るゝ道なきに失望せし如く、蹠よろめ躑めきて卓てい子ぶるに仆たおれ掛り、唯口の中にて「私しでは有りません、私しでは有りません」と呶とてくのみ。目「其様な事は判事の前へ出た上で云うが好い、云た所で逆も

採用はせられ舞まい、既に其方の共謀者藻西倉子が何も彼も白状して仕舞たから」此言葉に生田は電氣にでも打れし如く跳返はねり「え、え、あの女が、其様な事は有りません、少しもあの女の知ツた事で無いのですから」驚きの余りすべにすべらせたる此言葉は充分の白状に同じければ目「して見ると其方が一人でたく計んで一人で行ツたと云うのだな、夫だけ聞けば沢山だ」と云い目科は更に余に向いて「君、あの卓ていぶる子うちの中などをあらた検めたまえ必ず藻西倉子の写真や艶ふ書みなどが入いって居るから」と云う、余は其命そめいに従わんとするに生田は痛いきどおく憤おしり拳を握りて目科に打て掛らんとせしかども、二人に一人の到底及ばぬを見て取りし如く唯ただ悔しげなる溜息を洩すのみ、果して卓ていぶる子其他の抽ひきだし斗よりは目科の推量せし通り倉子よりの

艶書ふみも出で且其写真かつも出たる上、猶お争われぬ大の証拠だいと云う可
きは血膏ちあぶらの痕を留めし最鋭いとき両刃もろはの短剣なり、殊に其形はコロ
ツプの裏の創にシツクリ合えり、生田の罪は最早もはや秋毫しゅうごうの疑
い無し。

是より半時間と経ぬうちに生田は目科と余の間にはさまりて馬
車に乗せられ警察本署へと引立られしが余は其道々も余り捕縛の
容易あきなりしに呆れ「あゝ案じるより産むが易い」と呶けば目科は
「先ア探偵まに成て見たまえ斯う易々と捕縛されるのは余り無いか
ら」と答えたり。

斯かくて生田は直たゞちに牢屋へ入られしが、牢の空気は全く彼れの強
情くじを挫くじきし者と見え彼れ何も彼も白状したり其大要を搔かい摘つまめば

彼れは久しく藻西太郎と共に飾物の職人を勤めしだけ太郎の伯
 父なる梅五郎老人とも何時頃よりか懇意に成りたり、此度老人を
 殺したる目的は全く藻西太郎を憎むの念より出しものにて彼れに
 人殺しの疑いを被せ其筋の手を借りて亡き者とし其後にて倉子と
 添そいとげ遂ると云う黙算なれば、職人の衣類を捨て故々藻西の如き
 商人の風に打扮いでたちプラトを連れて老人の許へ問行きしなり、是だ
 けにて充分藻西に疑いの掛るならんと思いたれど猶お念の上にも
 念を入れ、老人の死骸の手を取り、傷より出る血に染めて、宛あたかも
 老人自らが書きし如く床に血の文字を書附て立去りしとなり、是
 だけ語りて生田は最誇いとほこりがお顔かほに「仲々能く計だと思いましたが老
 人を殺せば倉子の亭主は疑いを受けて亡き者に成り其上老人の財

産は倉子にころが転り込で倉子は私しの妻に成ると云う趣向ですから石
一個で鳥二羽を殺す様な者でした、夫が全く外れて仕舞い此通り
成たとは悪い事は出来ぬ者です」目科は是だけ聞き「成るほど趣
向は旨うまいけれど仕舞際しまいぎわに成て其方の心が暗み大失策やらかを遣したか
ら仕方が無い、其方は自分の右の手で直に老人の手を取たから老
人の左の手であの文字を書せた事に成て居る」此評を聞き生田は
驚きて飛上り「何と仰おっしゃ有る、だつて夫が為に私しへ疑いの掛ッ
た訳では有ますまい目「夫が為に掛ッたのさ、左の手だから老人
が自分で書たので無いのは明白で、既に曲者が書たとすれば藻西
太郎が自分で自分の名を書附ける筈は無いから」生田は宛あたかも伯はくら
楽くの見落おとされたる千里の馬の如く呆れて其顔を長くしつ「是は驚

た、あゝ美術心が有ても駄目だ、余り旨く遣^{やり}過^{すぎ}ても無益の事だ、
 貴方は猶^まだあの老人が左^{ひだり}得^{えて}手で、筆を持つまで左の手だと云う
 事を御存じないと見えますな「あゝ、^さ扱^ては彼の老人左きゝにし
 て曲者の落度と見しは却^{かえ}つて其手際なりしか、目科の細君が最^{いと}賢^とき
 説を立てながらも其説の当らざりしは無理に非ず、後に至りて聞^き
 糺^とせしに老人は全く左^き利^きなりしに相違なし、左^さすれば余が自ら
 大発見大手柄と心の中にて誇りたる事柄も実は全くの間違いなり、
 夫を深くも正さざりし余と目科の手落も浅しと云う可からず、探
 偵の事件には往^{おう}々^く斯^かくまでに意外なる事多し此一事は此後余が真
 実探偵社会の一員と為りてよりも大^{おお}に余をして自ら^{かえり}省^みる所あらし
 めたり、既に実^まの罪人の捕まりし事なれば倉子の所^お天^と藻^も西^{せい}太^{たい}郎^{らう}は

此翌朝放免せられたり、判事は放免言渡しするとき、彼れが我身に
覚えも無き事を易やすく々と白状して殆ど裁判を誤らしめんとするに
至りし其心得を痛く叱るに彼れ屢しばしば々首を垂れ「私しは自分よ
り女房が可哀相です、自分で一層罪そを引受け、女房を助ける積で
した、はい実は一凶もに最う女房が殺した事と思ひ詰めましたので、
はい畢ひつきよう 竟云えば女房が私しに貧しい暮しをさせて置くのが可
愛相で夫ゆえ伯父を殺して呉れたと思ひまして、はい爾とすれば
其志ざしに対しても女房を懲役に遣やっても済ぬと思ひまして、はい
夫でも昨夜探偵吏たんでいりのお話わに曲者が犬を連れて行たと聞き若しや
生田では有る舞いかと思ひ附いまき忌々しく成ませんでした能
く考えて見ると生田が其様な事をする筈は無く、矢張り女房が犬

を連れて行たのだと斯う思いまして其儘思い止まりました」此説明には判事も其女房孝行に苦笑いを催しつ、以後を誡めて放免したりとなん。

藻西太郎は此外に何事をも言立ざりしかど彼が己の女房を斯も罪人と思ひ詰めたる所を見れば、何か女房に疑う可き廉かどの有りしには相違なく、多分は倉子が一たび太郎に向ひ伯父を殺せと説ときす勧めたる事ありしならん、如何に女房孝行とは云え真逆まさかに唯一人の伯父を殺すほどの悪心は出し得ざりし故、言葉を托して一ひとつ月きふたつき一月と延し居るうち女房は我所天おつとの活智いくじなきを見、終ついに情夫の生田に吹込みたる者ならん、生田は藻西太郎と違ひ老人を縁ゆかりも由因ゆかりも無き他人と思えば左まで躊躇さする事も無く、殊に又之を

殺せば日頃憎しと思う藻西は死し老人の身代しんだいは我愛する美人倉子の持参金と為りて我が掌たな底そこに落がり込む訳なれば承知したるも無理ならず。

個は余と目科の考えにして孰れいずとも倉子が此罪の発起人なるに相違なければ倉子の自由自在に湧出る涙は能く陪審員の心を柔げ倉子は関係無き者と宣告せられ生田は情を酌量し懲役終身に言渡されたり。

藻西太郎は妻に代りて我身を捨てんとまで決心したる男なれば倉子が放免せらるゝや直たゞちに引取りて元の通りに妻とせり、梅五郎老人の身代は藻西太郎の手に落たれど倉子の贅沢増長したれば永く続く可しとも思われず、此頃は其金にてトローンの近辺へ不評

判なる酒店を開業し倉子は日夜酒に沈溺せる有様なれば一時美しかりし其綺きりよう倆も今は顔くずれて見る影なし、太郎も倉子が酔たる時は折々機嫌を取損ね打ちようちやく擲せらるゝ事もありと云えば二人はそろゝ零落の谷底に墮落し行く途中なりとぞ。

(以上、後の探偵吏カシミル、ゴヲドシルしる記す)

(終)

(小説集『綾にしき』明治二十五年八月刊収載)

青空文庫情報

底本：「日本探偵小説全集」 黒岩涙香 小酒井不木 甲賀三郎
集」 創元推理文庫、東京創元社

1984（昭和59）年12月21日初版

1996（平成8）年8月2日8版

初出：「綾あやこしき」

1892（明治25）年8月刊

入力：網迫、土屋隆

校正：川山隆

2006年4月30日作成

2012年9月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

血の文字

黒岩涙香

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>